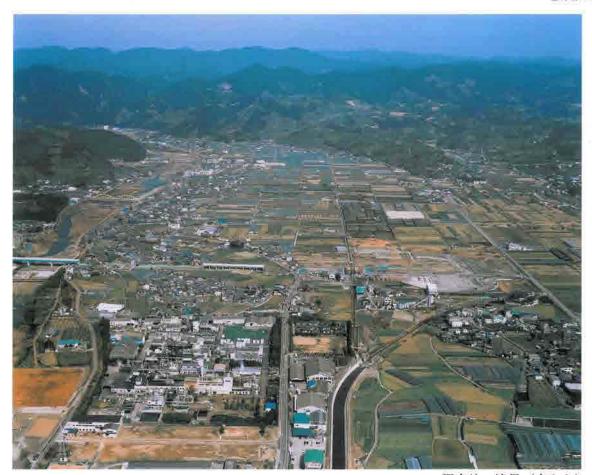
# 徳 蔵 地 区 遺 跡

- 国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査報告書 -

2003年8月

財団法人 和歌山県文化財センター



調査地 遠景 (南から)



VI区 微高地縁辺(北から)

# 序文

和歌山県は広く外海に開けるとともに、紀ノ川、有田川など、河川流域ごとの特色ある文化を育んできました。南部地域も南部川の両岸の丘陵一面に梅林が広がる独特の景観を呈しており、「南高梅」で知られる梅の一大産地であります。また、千里ヶ浜の沖合いに鹿島が浮かぶ風光明媚な土地として有名です。

財団法人和歌山県文化財センターでは、平成9年度から、近畿自動車道の南部インターチェンジ建設に関連する工事に先立って、南部平野における発掘調査を実施してまいりました。 調査を経て、縄文時代中期に測る集落を確認した徳蔵地区遺跡や、複郭構造を持つ高田土居 城跡などの重要遺跡を確認することができました。

このうち、国道424号の改築工事に伴う調査を実施した範囲について、出土遺物の整理事業を行い、その成果を発掘調査報告書として刊行するに至りました。発掘調査および出土遺物の整理、また本書の作成にあたっては、和歌山県日高振興局を始めとする多数の方々のご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

この調査成果が広く活かされ、地域の歴史遺産として受け継がれてゆくことを願ってやみません。

平成15年8月

財団法人 和歌山県文化財センター 理事長 木 村 良 樹

# 例 言

- 1. 本書は、和歌山県日高郡南部川村大字徳蔵に所在する徳蔵地区遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査は、国道424号道路改築工事に伴うもので、発掘調査を平成10・13・14年度に、遺物整理を 平成15年度に実施した。
- 3. 発掘調査及び遺物整理業務は、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
- 4. 事務及び調査組織は下記のとおりである。

専 務 理 事 (事務局長兼務) 中谷博昭(平成10年度)、岩橋驍(平成13~15年度)

事務局次長 菅原正明(平成10年度)、畑中照雄(平成13年度)

松田正昭(平成13~15年度)、篠原隆(平成14年度)

管 理 課 長 西本悦子

副 主 查 松尾克人

理藏文化財課長 松田正昭(平成10年度)松下彰(平成13年度)渋谷高秀(平成14・15年度)

主 任 渋谷高秀(平成10年度調查担当)

副 主 查 黑石哲夫(平成13年度調查担当)

技 師 丹野 拓(平成14年度調查・平成15年度整理担当)

専門調查員 立岡和人、藤村瑞穂 : 調査補佐員 山野晃司

- 5. 発掘調査・遺物整理に際し、和歌山県日高振興局道路課、和歌山県教育委員会文化遺産課をはじめとする方々の助言・協力を得た。感謝の意を表したい。
- 6. 本文は渋谷・黒石・丹野が執筆した。執筆分担は本文目次に記した。
- 7. 遺構写真は各調査担当者、遺物写真は丹野が撮影した。但し木製品の写真は渋谷が撮影した。
- 8. 木製品の保存処理は4点を株式会社京都科学に委託し、その他を当センターが行っている。
- 9. 本書は丹野が編集した。
- 10. 調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

# 凡 例

1. 発掘調査で使用した調査コードは下記の通り。

平成10年度調査(国道424号線道路改築に伴う第1次調査・ I 区)…98-32・47 平成13年度調査(国道424号線道路改築に伴う第2次調査・II~IV区)…01-32・47 平成14年度調査(国道424号線道路改築に伴う第3次調査・V・VI区)…02-32・47

- 2. 調査の基準線は平面直角座標系(第VI系)を、標高は東京湾標準潮位(T.P.値)を用いた。
- 3. 土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』を使用した。

# 目 次

卷頭写真	1	調査地	遠景
------	---	-----	----

2 VI区 微高地縁辺

序	又
例	討

凡例
第1章 はじめに
第1節 調査に至る経緯と経過(黒石哲夫) 1
第2節 位置と環境(丹野 桁) 5
(1) 位置
(2) 地理的環境
(3) 歴史的環境
第3節 調査の方法(丹野) 8
(1)調査の方法8
(2) 整理の方法11
第2章 調査の成果
第1節 平成10年度の調査(I区)(渋谷高秀) 12
(1)層序12
(2)遺構と遺物
(3)小結19
第2節 平成13年度の調査(Ⅱ~Ⅳ区)(黒石) 20
(1) 層序20
(2) 遺構20
(3)遺物22
第3節 平成14年度の調査(V・Ⅵ区) ····································
(1) 層序28
(2) 遺構31
(3) 遺物35
第3章 まとめ
抄録

	写真図版目次	P L 15 1区 溝 1 出土木製品
		溝 5 出土土器
PL1	1 遺跡遠景①	PL16 II~IV区 出土遺物
	2 遺跡遠景②	PL17 V・M区 出土遺物ほか
PL2	1 遺跡遠景③	
	2 I区 全景	挿図目次
P L 3	1 1区 溝1 全景	
	2 【区 溝】	図1 調査区の設定状況4
	3 I区 溝1 土層断面	図 2   周辺の遺跡7
P L 4	1 【区 溝 1 木製品出土状況	図3 調査区の地区割図9
	2 1区 溝1 同近景	図 4 基本層序10
	3 1区 溝1・2・5	図5 I区 平面図12
P L 5	1 Ⅱ区 4層上面 検出遺構	図6 I区 溝1 木製品出土状況13
	2 Ⅱ区 5層上面 検出遺構	図7 I区 溝1 断面図13
	3 Ⅱ区 4層上面 人の歩行跡	図8 J区 包含層 出土遺物14
P L 6	1 Ⅲ区 4層上面 検出遺構	図9 I区 溝1 出土遺物①15
	2 Ⅲ区 5層上面 検出遺構	図10 I区 溝1 出土遺物②16
	3 Ⅲ区 北西部 7層上面 検出	図11 J区 溝 1 出土造物③17
	遺構	図12 I区 溝 5 出土遺物18
P L 7	1 Ⅲ区 南壁中央部 土層堆積状況	図13 Ⅱ~Ⅳ区 土層断面図21
	2 Ⅳ区 6層上面 検出遺構	図14 Ⅱ~Ⅳ区 第1・2遺構面23
	3 IV区 6層上面 土坑・ピット	図15 Ⅲ・Ⅳ区 第3遺構面25
P L 8	1 V区 第1遺構面	図16 Ⅲ・Ⅳ区 第4遺構面26
	2 V区 第3遺構面	図17 Ⅱ~Ⅳ区 出土遺物27
	3 V区 第4遺構面	図18 V・Ⅵ区 土層断面図29
P L 9	1 VI区 全景	図19 V・M区 第1・2遺構面30
	2 VIX 微高地上の遺構状況	図20 V・VI区 第3・4遺構面32
	3 VI区 南西部近景	図21 V · VI区 遺構図34
P L 10	1 VI区 上坑 S X 34	図22 V・VI区 出土遺物 ······35
	2 VI区 土坑 S K 89	
	3 VI区 掘立柱建物跡 S B01	表目次
PLII	I 区 包含層/溝 1 出土上器①	The second of th
P L 12	I区 溝1 出土土器②	表 1 南部平野発掘調査履歴・概要2・3
P L 13	I区 溝1 出土土器③	表 2 調査工程4
P L 14		表 3 土層と遺構面10

# 第1章 はじめに

# 第1節 調査に至る経緯と経過

調査区の存在する和歌山県日高郡南部川村は西奉婁郡と接し、南部川下流左岸に比較的広い平野が開けている。この平野部や周辺の丘陵部には縄紋時代から中世に至る多数の遺跡が営まれており、弥生時代末の大型銅鐸も6個出土している。中世には高野山領南部荘が設置され、八丁田暉と呼ばれている条里地割に区画された水田部にその景観を現在にまでとどめている。水田南部には室町時代後期に複郭式の巨大な城館である高田上居城が築かれている。このような遺跡の密集地において、以下に述べる各種開発工事が実施され、大規模な発掘調査が行われた。南部平野における発掘調査に至る経緯と経過を概観してみたい。

近年、和歌山県では交流圏の拡大を図るため、太平洋新国土軸、近畿南北連携軸、紀淡海峡交流圏等の新しい交流軸や交流圏の形成に向けた取り組みを行っている。さらに、県内における格子状の道路整備や道路と公共機関との有機的連携により、主要都市間を概ね2時間でつなぐ、県内2時間行動圏構想を推進し、県上の一体化を進めている。紀北地域と紀中・紀南地域を結ぶ主要幹線道路は複雑な海岸線を南進する国道42号線であるが、慢性的な渋滞が続いている。そのため、近畿自動車道紀勢線の早期延長が望まれており、御坊インターチェンジから南部インターチェンジまでの建設が事業化された。南部平野では、高速道路建設に伴い各種開発工事が一挙に開始された。高速道路への取付道路の整備、国道・県道・町村道の拡幅、河川改修などである。また、県と近畿農政局では総合的な農業基盤整備に着手し、南部町と南部川村では大規模な農業用地の区画整理が実施されることが決定した。

このような各種開発行為に伴う試掘確認調査と発掘調査は平成7年度から開始され、和歌山県文化財センターが実施した発掘調査面積は平成14年度までに72,663㎡となっている(表1参照)。 県内で一地域で発掘調査した事例では過去最大規模である。平成10年度からインターチェンジ本体部の調査が開始され、平成13年度まで毎年13,000㎡前後が調査された。インターチェンジへの取付道路の整備など付随工事に伴う調査は平成13年度がピークで、平成14年度で南部平野における公共工事に関連する発掘調査はほぼ終息を迎えている。また、マンション建設に伴う発掘調査など、民間工事に関連した調査事例も散見される。

本報告書で記述する国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査は平成10年度に苦損支線の東に隣接する料金所手前部1,612㎡を調査し(IIX)、平成12・13年度に国道から料金所までの取付部4,341㎡を調査し(東からII・II・IV区)、平成14年度に取付部の一部544㎡を調査した(V・VI区)。何れの調査区も縄紋時代から古墳時代にかけて集落が営まれた微高地や高田土居城跡から北西にややはずれており、湿地状の地形を呈する部分が多い。

# 表1 南部平野発掘調查履歷,概要

			南音	平	野	発	掘	調	査	履	歴		
	事	業	名	委託	機関	名		対象	遺跡	名		1995年	1996年
А		3動車道紀勢。 辺所在遺跡確		和歌山隽	具道路建	設課	徳蔵は		が、高田 ビン寺跡	土居城	跡	234mi	300mi
В		動車道南部 I 應藏地区遺跡:		日本道路	公団関語	哲支社	徳蔵均	也区遺跡	↑、高田 	上居城	跡		
С		号線道路改勢 蔵地区 <b>遺</b> 跡発		和歌山県	具日高振 世設部	興局		徳蔵	地区遺紀	洂			
D		: 富田南部線 成地区遺跡他		和歌山県 建	具日高振 建設部	興局	徳蔵は		が、高田 塚遺跡	土居城	跡		
Ε		\$遠関連改修。 義地区遺跡他		和歌山県	表日高振 建設部	興局		徳蔵	地区遺迹	硛			
F	南部荘	園関連遺跡発	<b>Ě掘調査</b>	緑ジ	<b>資源公団</b>	]				跡、熊區 11 · II			
G		芽南部南部川: 発掘調査(さ		和歌山隽	2月高振 建設部	興局	徳蔵は	也区遺跡	ᆙ・髙臼	土居城	跡		
H	帳圖遺跡	(村道熊岡島 発掘調査	5原田線)	南	部川村			熊的	引∐遺跡	ş.			
	*Cの調	査は本報告	書に記載									234mi	300:ni
-	<del></del>		,	調		 套	村	<del></del>	更	<u> </u>			
本	成 7 年995 成 7 1995 成 8 年996 成 8 年997 成 8 年997 成 8 年997 成 8 年998 成 8 年999	紋時では、 を では、 を でいます。 を では、 を でいます。 を でいまます。 を でいます。 を でいます。 を でいます。 を でいます。 を でいます。 を でいます。 を でいまます。 を でいます。 を でいます。 を でいまます。 を でいます。 を でいます。 を でいまます。 を でいます。 を でいます。 を でいまます。 を でいまます。 を でいままます。 を でいまままままままままままままままままままままままままままままままままままま	16 【選③ は 図 は と 、 玉 図 辺 羽 な ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	包含層が30で3m×3r 色岩の構か東流代央辺機の上でである。 一角ではいいではいいでは、 一角ではいいでは、 一角では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一般では、 一を 一を 一を 一を 一を 一を 一を 一を 一を 一を 一を 一を 一を	夏の ジャン でという できない アカー のはない 一番関 及 部 頃れ 11 なて 高まない けんし を切る こ	る。 ある。 がので、 700mi	2地点のチョウンスをひんである。 との では、 の の で の で の で の で の で の で の で で か で で で で	設、査からのしとし生北れたので、こので、こので、こので、こので、こので、強いので、強いので、強いので、強いので、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、この	調査を で 遺構・通子 16世の く 時間 2 16世の く 時間 2 16世の く 16世の 4	を ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	基中に満上居らを物は記れて世確がほ城弥検・は武	を検出した。存 層序は①層がれたとの層がで、た ので、では、一点を関係である。 を表しては、 を表して、 を、 を、 を、 を、 を、 を、 を、 を、 を、 を、 を、 を、 を、	特作土、② 水田の可 た。 以前の自然 ら。出土る。 かけての整 の水田を検 がある。 がある。 がある。 がはない。 がはない。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある
	平成12年度 B-2000 の集落、弥生時代前期の竪穴住居、古墳時代前期の集落などを検出。関東・東海・中部高地・四国など から殿入された土器・石器が確認され活発な交流がうかがえる。縄紋時代の埋襲墓と配石墓が検出され、 当時の墓制が明らかになった。 徳蔵地区遺跡の中央部及び北部・西部の13,167㎡を調査した。西部では弥生時代前期の木材を加工し												
1 .	成[3年度 B-200]	組み合われ 柱建物・対	せた井堰を 井戸・埋桶	検出した。 などを検り	・室町開 出し、身	特代のA 関辺のタ	高田土居 作堀から	城跡北 橋脚遺	外郭部 構や土作	では溝っ 留め <i>材</i> が	で区画 など、	された屋敷地が当時の土木技術	nら・掘立 所を復元す

		南部	平 野	発 掘	調査	履	歴						
1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年		合計	参考文献					
							534m	文化財センター年報 1995 1996					
1, 700m²	i6, 081m²	12. 711m	13, 148m	13, 167m			56. 807m	文化駅センター年報 1997~2001					
	1. 612mi			4, 341m	544n	1	6. 497m	文化財センター年報 1998 2001 2002					
	2. 530㎡ 2. 530㎡ 文化駅セ 2. 530㎡ (文化駅センス)												
				2, 23411	2, 399r.	i l	4, 633m	文化財センター年報 2001 2002					
				216m	1, 014r.	i	1. 230m	文化財センター年報 2001 2002					
					2021	ı l	202 m	文化財センター年報 2002					
					230r.	1	230m	文化財センター年報 2002					
	17. 693m²	12, 711m	13, 148m	20, 478m	4. 389r.	ni	72. 663m						
		部	查		· 要	 į							
平成[3年度 D-2001	2m・厚さ0 棟確認され	.2mの土塁基 た。一時期古	底部を検出した く、条里地割(	た。多数の柱間 こ平行する堀も	が確認され、 5内堀の外側で	掘立	柱建物が存	)る。内部部では幅 存在し、礎石建物も] の竪穴住居跡4棟と					
平成13年度 E-2001	る自然流路 土坑が検出	を検出した。 され、士器・	西側では徳蔵5 サヌカイト片/	他区遺跡からこ が多く出土した	○づく微高地の こ。	分端部	が確認され	対時代後期と考えられ 1た。縄紋時代後期の					
平成!3年度 F-2001	八丁田圃の南部から南東部にかけての水田地帯と南東側の丘陵裾部に2×2mの減掘坑を54地点に設定し、調査を実施。熊岡の丘陵裾部では、縄紋時代から近世にいたる多種多様な土器が出土した。東吉田												
平成14年度 F-2002	八丁田邇南部の水田地帯と南側の微高地に2×2mの試掘坑を60地点、水田畦畔確認のための4×4mの 試掘坑を6地点に設定し、調査を実施。熊岡地区と東吉田地区では4地点で本調査を実施。熊岡地区では 年度 古描時代の溝・ピット 鎌倉時代の滞等を確認した。弥生土器や製造土器等も出土した。東吉田地区で												
平成14年度 G-2002	て北から幅 土によって	12.6~4.0mの 、大きく攪乱	第Ⅰ・Ⅲ・Ⅱ: されていた。	工区を設定した 外堀の堆積上*	た。調査地点) P西房部と推り	ඩෙට්ට් සිට්ට්	注音然流路が 1る選擇を-						
平成14年度 H-2002	北半部では 間隔で直線	中世のピット に並ぶものか	・土坑・満等	を検出した。) 柱建物である	ピットは径30c 可能性がある。	m前後	そ・深さ10~	実施した。調査区の -30cm程度で、約2m 世の土器類や陶磁器が					

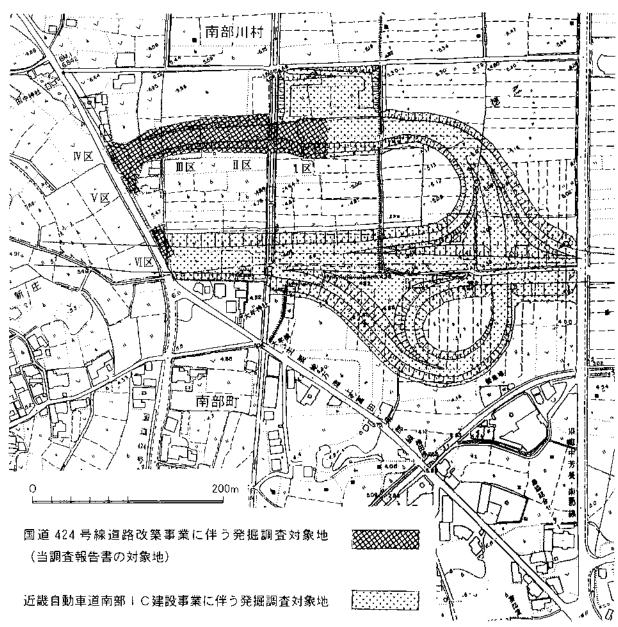


図1 調査区の設定状況(1:4.000)

表 2 調查工程

調査区	1998		1999		2001			2002														
沙耳区	10	11	12	1	2	3		10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
I 🗵	////			lui.																		
区II																						
皿区				,								777										
NZ																luci l						
V区																					1	
VI区																						

# 第2節 位置と環境

# (1) 位置

徳蔵並区遺跡の所在する南部平野は和歌山県中央部の海岸寄り、南部川左岸下流域に位置する。 平野は南部川村から南部町にかけて東西1.5km、南北2.5kmの範囲を有し、周囲を標高100~200mの 丘陵に囲まれている。

徳蔵地区遺跡は平野南端の旧河川が収束する地点にあたり、旧地形では微高地状の地形を呈していたものと考えられる。当報告書の調査対象地区は、遺跡の所在する微高地の北から西にかけての縁辺部付近に相当する。地籍は南部川村徳蔵字 向 流・下流・斎藤にあたり、標高は 5~5.5 mである。

調査地は、JR南部駅から北に約1.5km、徒歩約20分の位置にある。和歌山・御坊方面から国道42号線で向かうと、南部町内に入り南部川を超え、南道の交差点を左折すると、国道424号線に入る。約1.5kmで県道主富田南部線と交わるが、この交差点から道に沿って右側が調査した地点である。

## (2) 地理的環境

まず、南部地域の地質について概説する。西南日本は中央構造線によって内帯(日本海側)と 外帯(太平洋側)に分けられる。外帯はさらに、仏像 糸川構造線によって南北に分けられ、南側を四万十区と呼ぶ。南部地域はこの四万十区に属する。さらに細かくみると、南部地域は北部 山間地が日高川帯、中央部が音無川帯、海岸寄りが全婁主帯と田辺層群に属している。

南部川村から南部町まで広がる平野部は、南部川とその支流である古川の堆積により形成されている。南部川村の住宅地は、河川の自然堤防及び丘陵縁辺部に立地している。また、南部町の中心となる市街地は、海岸沿いに発達した砂堆の上に形成されている。

日高郡南部川村は和歌山県の中央部に位置する村で、面積は約94km<sup>2</sup>、人口は約6,900人、北は日高郡竜神村、西は日高郡印南町、東は西牟婁郡中辺路町と田辺市、南は日高郡南部町と接している。村域を南北に南部川が貫流しており、下流域の南部平野を除き、大半を丘陵地・山地が占めている。丘陵一面に梅畑が作られており、日本一の梅の産地として夙に有名である。また、備長炭の生産も行われている。南部川村は、日高郡の中心である御坊市内よりも田辺市に近く、文化・商業面でも田辺市との関係が強い。

現在、徳蔵地区遺跡の周辺は条里型地割の整備された八丁田町として知られており、一面に平坦な水田が広がっている。集落は相対的にやや高燥な地を選んで立地しているが、それとて水田との比高差は1mほどしかない。このような平坦な地形となったのは中世の南部平野の大規模な水田化に伴うもので、それ以前の南部平野は自然河川の流れる低湿地と微高地からなる複雑な地形を呈していたものと考えられる。

## (3) 歴史的環境(図2)

南部平野の旧石器時代から縄紋時代前期までの遺跡はいまだ知られていない。縄紋時代中期・後期の遺跡としては、当遺跡(旧高田遺跡・梅田遺跡周辺)のほか、岡の段遺跡、新庄遺跡、大塚遺跡などが知られている。また、縄紋時代晩期の遺跡としては、当遺跡(旧徳蔵遺跡・大年遺跡)のほか、片山遺跡が知られている。これらの遺跡からは突帯紋土器が出上し、弥生時代前期まで続くものと考えられる。

弥生時代中期の遺跡としては、片山遺跡・高見遺跡が知られる。片山遺跡では土坑と溝状遺構が多数確認された。また、田文字遺跡・津殿遺跡・青蓮谷遺跡・上の尾遺跡から石器類が出土している。

南部平野をとりまく丘陵上には、6箇所の銅鐸出土地がある。銅鐸は弥生時代中期から後期にかけての大型品であり、和歌山県北部よりも遅い時期に導入されたものと考えられている。周辺の丘陵からは梅畑開墾に伴い土器が多量に出土したらしく、弥生時代中期から後期にかけての高地性集落が存在したものと推定される。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡としては、大塚遺跡、片山遺跡が知られている。大塚遺跡は南部平野下流域の比較的大規模な集落跡であり、このころに竪穴住居跡が円形から方形へと移行する状況が確認されている。また、片山遺跡は藁域であり、方形周溝墓が確認されている。この二つの遺跡からは陶質主器が出土しており、紀ノ川筋や朝鮮半島との交流を物語っている。

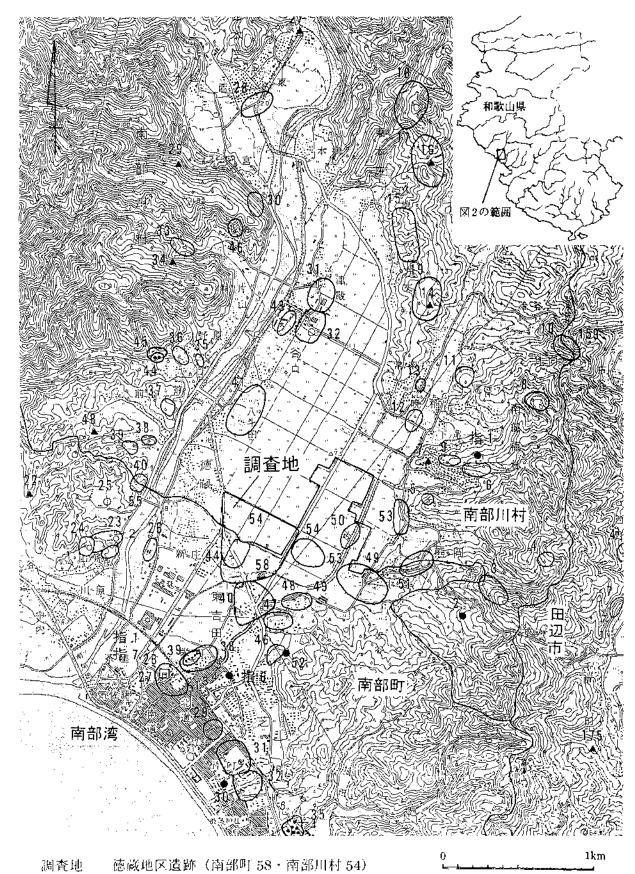
東吉田 I 遺跡では島状微高地と古墳時代前期の溝等が確認されており、上坪遺跡においても古墳時代の微高地の存在が想定されている。古墳は集落域よりも海岸に近い場所にあり、城山古墳群、芝古墳群、埴田古墳群等が散在する。また、製塩遺跡として、大日津泊り I 遺跡が著名である。

奈良・平安時代の遺跡としては、起請ヶ谷窯跡、閉谷窯跡が知られる。平安時代になると熊野 三山への参詣が盛んになり、南部王子社等の王子社が建立された。奈良・平安時代の遺跡は他の 時代よりも確認例が少ない。

平安時代末から鎌倉時代になる頃には、南部平野は南部荘として開発され、以後高野山領として室町時代まで存続する。当該時期の景観については、近年文献等からの検証も行われ、成果があげられている。なお、現在みられる整然とした水田景観は、鎌倉時代の条里型地割りに基づくものであることが確認されている。

室町時代後期には平須賀城跡や高田上居城跡等大規模な城館が建造されており、大規模な発掘調査が実施されている。

江戸時代には、徳蔵地区遺跡(旧梅田遺跡・大年遺跡)に鋳造関連の技術者が住んでいたという記録があり、付近からは鋳造に関連するとみられる上坑や焦上が確認されている。



南部川村 29雨乞山銅鐸出土地 31津殿遺跡 36田文字 I 遺跡 39青蓮谷遺跡 40ブゼン寺跡 41八斗田遺跡 53熊岡 II 遺跡

南部町 23城山古墳群 24起請ヶ谷窯跡 25閉谷窯跡 26新庄遺跡 27三鍋王子跡 28高見遺跡 32片山遺跡 35埴田古墳群 39芝古墳群 40大塚遺跡 44高田土居城跡 47岡の段遺跡 50上坪遺跡 53東吉田 I 遺跡 54東吉田 II 遺跡 55ブゼン寺跡

図2 周辺の遺跡(1:25,000)

# 第3節 調査の方法

# (1)調査の方法

発掘調査業務は当センターの調査員が現場での指揮にあたり、掘削等の上木工事は工事請負方式により業者へ発注し、記録の作成については補助員を直接雇用して業務を実施した。調査は試掘データをもとに、近世以降に形成された層は機械で掘り下げ、中世以前の遺物包含層及び遺構を入力で掘削した。

#### 遺跡の名称と範囲

従来、調査区周辺の遺跡は、徳蔵遺跡・養年遺跡・高田遺跡・梅田遺跡・古川遺跡・高田土居城跡などが知られており、徳蔵地区遺跡という名称の遺跡は存在していなかった。しかし、近畿自動車道の建設に関連して試掘調査・本発掘調査が行われ、従来の遺跡範囲外に調査が及ぶに至り、縄紋時代から中世の南部荘に関連する時代までを対象とした複合遺跡として、本発掘調査の実施された範囲全体を徳蔵地区遺跡として括ることになった。遺跡の範囲設定後も周辺における調査は継続されており、今後も遺跡の範囲変更が生じる可能性が高い。

#### 調査区名 (図1・3)

徳蔵地区遺跡では現場に応じて、年度や調査順序を示す数字・アルファベット・方位等により名づけた調査区名を用いてきた。この調査区名は一定の法則性に適っておらず、欠番等も多いことから、国道424号線の改築工事に伴う調査のみについて、調査区名を振り直すこととした。調査区名は南部インターチェンジ料金所予定地から東へI区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区と続き、そこから南へV区、Ⅵ区という順序で設定した。各調査区はそれぞれI区が平成10年度の3A区、Ⅱ~Ⅳ区が平成13年度の1~3区、V・Ⅵ区が平成14年度のA・B区に対応している。

#### 地区割り (図3)

地区割りは国土座標第V系のX=-246,100、Y=-61,500を基点に、100mごとの大区画と、4mごとの小区画を用いて設定した。大区画は北から南へ $1\cdot2\cdot3\cdots$ 、東から西へ $A\cdotB\cdotC\cdots$ と順番に振り、徳蔵地区遺跡全体をカバーしている。今回の調査地の大区画は $3G\cdot4G\cdot3H\cdot4H\cdot3I\cdot4I$ 区である。小区画は、北から南へ $1\cdot2\cdot3\cdot\cdots\cdot25$ 、東から西へ $a\cdotb\cdotc\cdot\cdots\cdoty$ と順番に振り、一つの大区画を東西と南北に25等分している。大区画と小区画を組み合せた表示(例えば3H20bなど)に基づいて、遺物の取り上げを行っている。

#### 遺構の名称

遺構番号は各調査区ごとに付けている。 I・V・VI区では検出した遺構すべてに番号を付けているが、 II ~IV 区では遺物の出土した遺構のみに遺構番号を付けている。

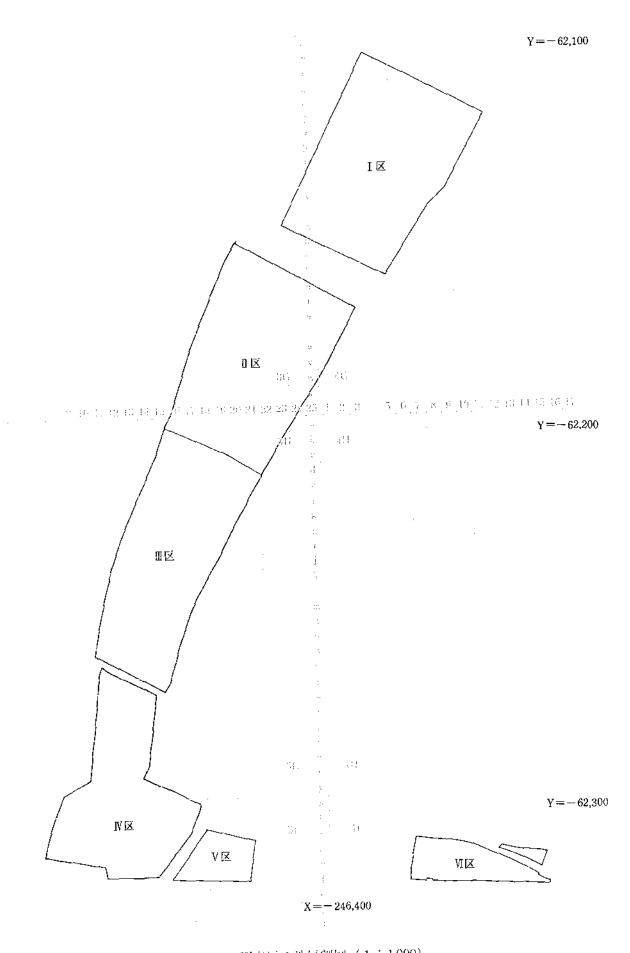


図3 調査区の地区割図(1:1,000)

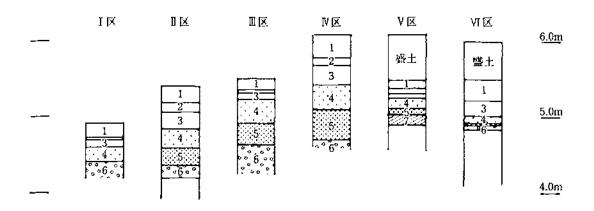


図4 基本層序(1:50)

表 3 土層と遺構面

層名	土色名と土性	Munsell notation	土層の内容
1層	灰色砂質土	2.5Y4/1	現代の耕作土
2層	明黄褐色砂質土	2.5Y6/8	現代の床土
3層	褐灰色砂質土	10YR4/1	近世の耕作土
4層	褐灰色~黄灰色粘質土	10YR4/1~2.5Y6/1	中世の水田耕作土
5層	黒褐色~にぶい黄褐色粘土	10YR3/1~4/3	古墳~平安時代の遺物包含層
6層	黄褐色~オリーブ褐色粘質土	2.5Y4/1~4/3	弥生時代の遺物包含層
7層	灰黄褐色~オリーブ褐色砂質土	10YR4/2~2.5Y4/4	縄紋時代晩期の遺物包含層
8層	褐灰色~褐色粘質土	10YR5/1~4/4	地山

遺構面	Ι区	Ι区	Ⅲ区	Ν区	V区	VI 区
3層上面		J			近世	近世
4層上面		中世	中世		中世	中世
5層上面		(古墳~古代)	平安	(古墳~古代)		(古墳~古代)
6層上面	(弥生後期~庄内)		(弥生)	(弥生)	(古墳)	古墳後期
7層上面			(縄紋晩期)	(縄紋晩期)		
8層上面					縄紋晩期	縄紋晩期

## 層序と遺構面(図4・表3)

各年度の調査ごとに平成10年度には 6 層、平成13年度には 7 層(細分すると168層)、平成14年度には 8 層を確認している。各調査区の土色と土性、標高、出土遺物等を勘案して、次の 8 層に分類した。

1層は現代の耕作土で灰色の砂質土、2層は床土で明黄褐色の砂質土である。I区ではこの下にかさ上げ土が盛られていた。3層は近世の陶磁器が出土する耕作土で、砂質が強いものと粘質の強いものがある。粘質で床土のあるものについては水田耕作土と考えられるが、砂質のものについては畑の耕作土とも考えられる。鍬溝等の痕跡も数箇所で確認されている。4層は中世の水田耕作土層である。3層よりも結質であり、鉄分及びマンガンの酸化した粒を多く含んでいる。畦畔は11区等で確認している。4層は上下2層ある場合が多く、出土遺物は僅少であるが、上層

を室町時代(4 a 層)、下層を鎌倉時代(4 b 層)と考えている。5 層は黒褐色~にぶい黄褐色の 粘質土あるいは粘土であり、水田開発前の湿地状の堆積を示している。出土遺物は微量であるが、 黒色上器や土師器、須恵器が出土する。中世水田開発以前に微高地であった場所については、褐 色味の強い遺構面が形成されており、縄紋時代から古墳時代までの遺構が確認できる。6 層は黄 褐色~オリーブ褐色の粘質上であり、弥生時代の堆積である。当報告書対象地内では、良好な遺 構はみられず、出上遺物も少ない。7 層は灰黄褐色~オリーブ褐色の砂質土であり、縄紋時代晩 期の突帯紋土器のみを含む包含層である。遺構とみられる土坑・ピットはあるが、残存状態は良 好ではない。8 層は褐灰色~褐色の粘質土であり、遺物は確認していない。しかし、6・7 層と 同様の堆積土であり、縄紋時代晩期以前の遺物を含むことも十分に考えられる。

このような基準に従って各調査区の該当する層を統合してまとめたのが、図4の上層図、層序 と遺構面の表である。一部の遺構面には時期の判然としないものがあったが、その場合は包含層 の年代を考慮して()の中におおよその時期を充てている。

## (2) 整理の方法

整理事業は当センター担当者が、整理補助員・整理作業員を直接雇用して業務にあたった。 部の整理作業については、発掘調査と併行して応急整理として現地で整理を実施した。整理作業 の概要は次のとおりである。

洗浄・注記・分類・登録については、出土遺物すべてについて実施した。注記は凡例で示した 調査コードと登録番号を記載したが、3 cm以下の細片については登録番号のみを注記した。登録 は取り上げ単位ごとに番号を付けた。

接合は基本的に、取り上げ単位内に口縁部あるいは底部を含む破片がある場合実施している。 復原・補強は基本的に、報告書に掲載する遺物を対象として、写真撮影・保管の上で必要な個体 について行った。また、報告書作成に伴い、遺物実測、トレース、組版等の作業を行った。

#### 保管状况

出土遺物は平成10年度分が8ケース、平成13年度分が10ケース、平成14年度がイケースあったが、報告書掲載分8ケース、その他26ケースに再整理して保管している。写真は現場では、6×7版モノクロネガ、35mmカラースライド、35mmカラーネガのフィルムを用いて撮影を行い、遺物写真は6×7版モノクロネガフィルムで撮影した。

遺構の実測図は平成10年度9枚、平成13年度64枚、平成14年度23枚を調査年度ごとにファイルし、遺物実測図110枚はファイル1冊にまとめた。遺物台帳、調査日誌は調査現場において作成した原本にて保管している。

これらの資料は和歌山県文化財センターで保管しているが、出土遺物については木製品の保存 処理を実施した後に、和歌山県教育委員会に移管される予定である。

# 第2章 調査の成果

# 第1節 平成10年度の調査(I区)

近畿自動車道南部インターチェンジ(仮称)の料金所国道側部分の調査である。

# (1)層序

現状は、水田である。第1層現代水田層、第2層床土、その下に盛土、第3・4層旧水田層、第5層黄褐色シルト層で遺構を検出した面である。盛土は、現在の水田層をかさ上げするために盛られた土である。調査区の西半分はこの盛土層工事の際に、旧水田層である第3・4層を掘削しており、残存していない。旧水田層は、調査区の東半分のみに部分的に残存する。

# (2)遺構と遺物(図5)

調査区の東側で溝を4条確認した。溝1は庄内期(弥生時代から古墳時代への移行期)、溝5は 弥生時代後期の遺構である。

#### 3 4 層旧水田層遺物 (図8)

調査では、層的な区分をせず、3・4層を同時に掘削しており、層による出土遺物の区分は出来ない。弥生上器、土前器、瓦器、須恵器、国産陶磁器、白磁、青磁、瓦などがある。層としては中世・近世の時期である。須恵器は、6世紀中葉の坏身(図8の1)、7世紀の宝珠つまみがつく坏蓋(2)、奈良時代の坏蓋(3・4)がある。5は白磁で、6は青磁碗である。

## 溝1 (図6・7)

調査区を南北に横切る形で検出した大溝である。断面形状は緩やかなV字形を呈する。

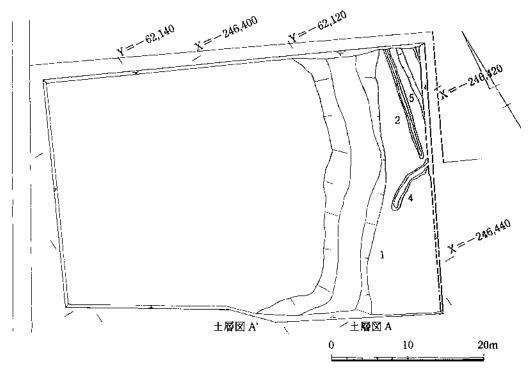
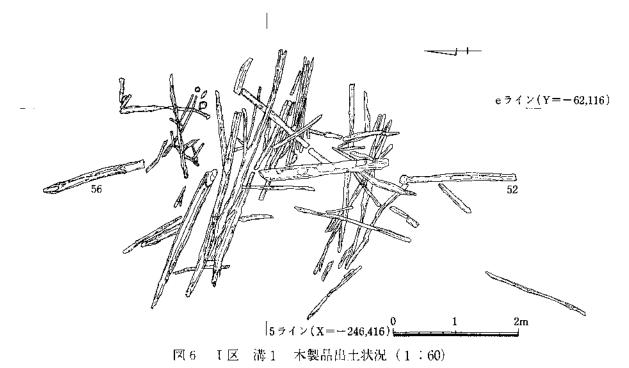


図5 I区 平面図(1:500)

北側での幅11m、深さ1.7m、中間での幅7m、深さ1.8m、南側での幅8m、深さ2mである。 地形が北から南に低くなっているため、水の流れる方向は、北から南に流れる。肩部はなだらか に落ちる。溝の南端部、とりわけ西側の肩部は、二段に落ち、上段は浅くなっている。下位の第 5層を除くと更に第6層を切り込み面とした溝1より更に規模の大きな流路が確認できる。

堆積土は、土質・色調により、大きく3層に区分できる。上層はシルト層で、中層・下層は粘土層である。下層中には両肩から落ちた土が堆積する。各層は細かく区分でき、中層・下層は流れ堆積の状況を呈する。溝の中央部付近の下層中より大量の木器片や炭片が一括して出土した(図6)。径15cm前後の柱状の木器が数本あり、他の多くの木器は、径5cm前後の細長い棒状の木器である。有頭棒などもある。多くの木器は、溝に直行する形で、他はそれらに上流より流れてきたものが取きとめられた状態で出土した。鳥形木製品と考えられる遺物も出土した。

調査は、上層から下層まで3層に区分して調査した。出土遺物は、土器・木器がある。遺物の



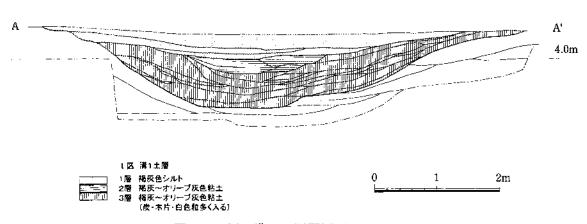


図7 I区 溝1 断面図(1:60)

量は下層が多く、上層が少ない。木製品は下層中に多く出土した。土器の色調は、全体に淡い黄 褐色が多く、微量の赤褐色系の土器もある。

#### 溝Ⅰ 3~1 層出土遺物 (図 9~11)

他の層に比較して遺物の量は多い。壺、甕、高坏、鉢がある。第3層~1層の層的な区分はあるが、時期的には違わない。

第3層出土の甕(25~41)は、くの字形に屈曲する日縁部をもつ。体部外面の叩きは、粗いものと細かいものがある。石上がりや水平方向の叩きである。日径に大小がある。日縁部には刻み目を施すものがある。外面には体部から日縁部上端まで煤の付着がある。内面には煤は付着しない。底部は丸底化した(40・41)などがある。第2層出土の甕(42・43)は、細かい叩きをもつ42と上げ底の底部破片(43)である。第1層出土の甕(44~46)は、くの字形に屈曲し直線的に延びる日縁部(44)と底部破片(45・46)である。細かい叩きで日縁部直下まで存在し、口縁端部は粘土を貼り付け継ぎ足している。底部径は小さい。ドーナッツ底になっている。土器の色調は、淡い黄褐色を呈する。

第3層出土の壺(7~13)は、中期に特徴的な凹線紋を口縁部に持つ直口壺(7)、口縁端部に 擬門線を施し、2個一対の円形浮紋を付ける広口壺(8)、二重口縁壺(9)、外反する口縁部を もつ小さな壺(10・11)がある。広口壷は、2点のみの出土で、非常に少ない。磨きをもつ底部 (12・13)も出土する。第1層出土の壺(14・15)は、直立する口縁部がなだらかに外反し、外面 に横方向の叩きをもつ球形の体部の15と直口壺の14がある。

第 3 層出土の高坏 (16~24) は、脚柱部が長いもの (23) と短いもの (16・17・20・21)、中実 (16・22・24) と中空 (17・20・21・23) がある。裾部に穿たれた孔は、1.5cm程度である。坏部 は、境状のもの (16~18) と屈曲して仲びるもの (19) とがある。境状の坏部には、日縁端部で 外戻する珍しい形態のものがある (16)。

磨き調整は粗く、脚柱部、裾部は縦方向に磨く。

第3層出土の鉢(47~49)と第 1層出土の鉢(50)がある。台付のもの(49・50)がある。47は、 口縁部の破片である。鉢は、他の 器種に比較して量的には少ない。

第3層出上の木器は、有頭棒 (51~57・69) そのうち杭状部の 残るもの(54・55・56・58)、板 材(61~63)、棒(64~68)、鳥形

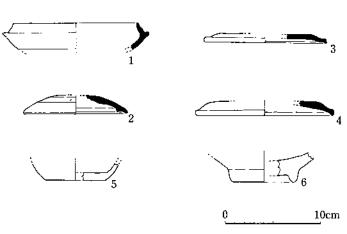
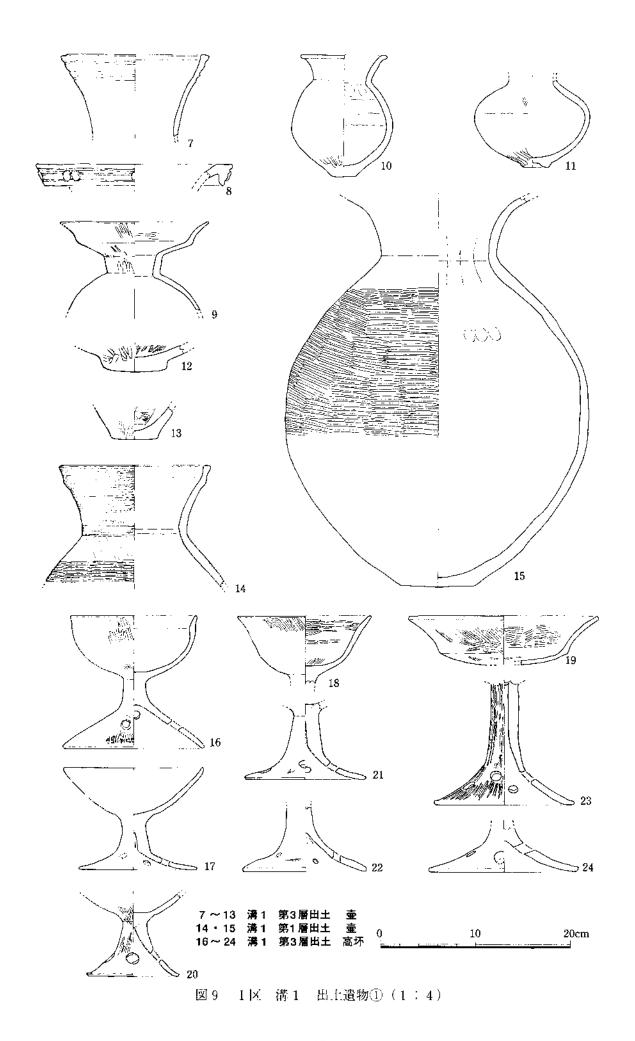


図8 I区 包含層 出土遺物(1:4)



- 15 -

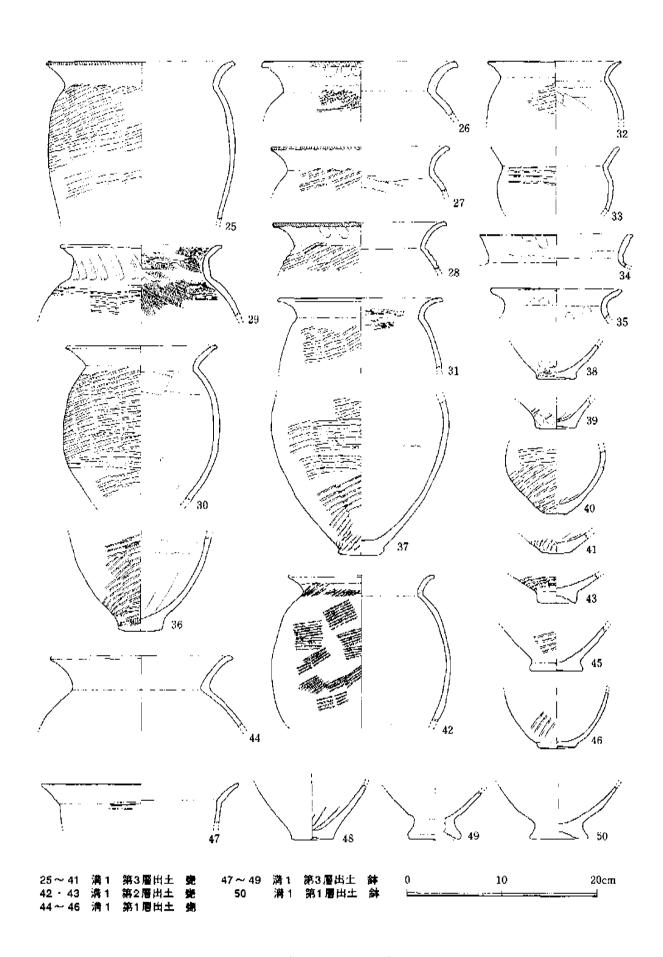
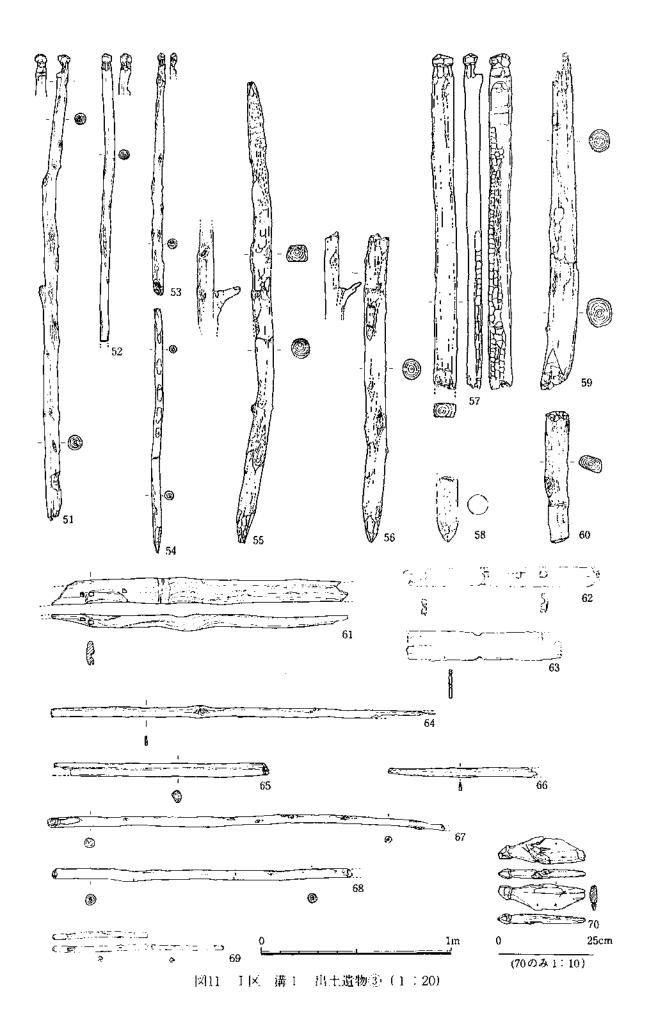


图10 工区 溝工 出土遺物②(1:4)



- 17 -

(70)などがある。有頭棒は、杭状に尖らし、他方を有頭にしている。55・56は、大型晶で、杭状 に尖らした部分より上120cm程度の部分に、枝を残し、支えの部分としている。組み合わせて、棚 などに使用したと想定できる部材である。57は、他の棒状の有頭棒とは違い、角材に加工してい る。58は、杭であるが丁寧に表面部分を加工している。60は、両端を平坦に加工しており、用途 が不明である。61は板材であるが、片面に孔を途中まで穿っており、貫通しない。62も板材であ るが、四角な孔を 4 穴、板材を貫通させずに穿っている。63は板材で、丁寧な加工を施す。64は、 板状の角材である。65は、二面のみ削り、片面は自然面を残し棒状にしている。節は取り除いて いる。67は、杭で細長い。杭部分は、一面削り尖らせている。68は、節を取り除いた棒である。 69は、片面を浅く削り、有頭にしている。70は、鳥形と考えられる木製品である。片面を削り平 坦にしており、他面は「面に区分して削っている。孔を2穴穿つ。何かにとめるための穴と考え られる。

#### 溝 2

|溝1と溝5の間で検出した幅0.7m前後、深さ0.2mの浅い溝である。堆積上はシルト層で一層で ある。出土遺物はない。

#### 溝 4

|溝2の南側で検出した幅0.6~1.1m、深さ0.2mの浅い溝である。堆積上はシルト層で一層である。 出土遺物はない。

### 滞 5

溝 5 は、溝 2 に平行して検出した小溝である。輻2.6m、深さ0.5mを測り、断面U字形を呈する。 堆積土は 4 層に区分できる。最下層には遺物が集中する。各層はシルト層で、最下層は粘土層で ある。各層共に炭が混ざる。

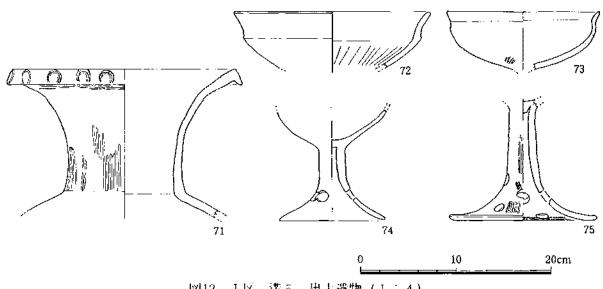


図12 I区 溝 5 出土遺物 (I:4)

遺物は、調査区北端の最下層から集中して出土した。壺 (71)、甕、高坏 (72~75)、鉢がある (図12)。壺は広口壺で、体部から口縁部にかけて僅かに外反しながら伸びる。口縁端部には円形 竹管紋を施す。摩滅のため、調整は不明である。他の上器と色調が違い、赤褐色系統である。

**甕は叩きをもつ体部破片のみである。** 

高坏は、坏部形態が違い、屈曲して伸びるもの(72)と境状のもの(73・74)がある。72は、 坏部の口縁部が体部に比較して短いことから、時期的には弥生時代後期中ごろの時期のものであ ろう。境状の坏部には、口縁端部が屈曲するタイプの珍しい形態のもの(73)もある。脚柱部は、 棒状の長いものと短いものの両タイプがある。75は、脚柱部と裾部の境界に、上に4個、下に4 個交互に孔を穿つ。穿孔された穴は、大きく、1.5cm程度である。

# (3) 小結

大規模な溝1は、南部平野を自然地形にそって流れる流路として機能していたことが土層から判明する。時期は、古墳時代初頭である。当該期の集落は、南の微高地、徳蔵地区遺跡、及び更に南の大塚遺跡に存在する。溝1周辺部には、微高地の存在はなく、住居跡も確認できない。溝1の東約50mの地点には、旧河川が存在し、その中に溝1と同規模の蛇行しながら流れる溝を検出している。一段落ちた溝の周辺は、小溝が走り、矢板で区画された小空間が存在する。当該期の水田と想定できる場所である。また溝1の南、約100m地点の調査区からは、当該期の溝を検出している。位置から考えて、溝1の延長線、あるいは分岐した溝と考えられる。溝1の機能は、用排水路の可能性が高い。木製品の存在は、柵を形成する杭などが多いため、部分的に溝の肩部に打ちこまれた可能性がある。

溝1出土遺物には、日縁部を垂下させる広口壺破片はごく少量である。甕は底部径も小さい。また高环の口縁部や裾部の発達が目立つ。他に二重口縁壺や小型壺の存在がみられる。そのため、溝1及び溝5は、布留式直前段階の庄内期の時期と考えられる。溝5出土遺物は広口壺や高坏の存在からみて弥生時代後期中頃と考えられ、南部地域の特色としては、出土量の多い高坏において、境形の坏部の口縁端部を外反させる珍しいタイプ (73) がみられる点が挙げられる。

# 第2節 平成13年度の調査(Ⅱ~Ⅳ区)

調査区域は現存する国道424号線から高速道路インターチェンジへの進入路部分である。南北幅約30m・東西延長約160mを測る縦長の範囲であったので、作業効率上、東側からⅡ・Ⅲ・Ⅳ区に分割して、調査を実施した。調査面積は4,341㎡である。Ⅱ・Ⅲ区は条里地割を踏襲した字下流で、Ⅳ区は字斎藤である。Ⅳ区から国道を挟んだ西側は南部川の旧河道だと推定される。

# (1) 層序(図13)

調査区の北側は造成工事により上部が撹乱されていたので、南壁と東西壁の縮尺 1/20の土層図を作成した。II 区の基本土層は上から標高約5.2~5.4mの水田耕作土・床土、旧水田の耕作土・床土の互層が数面、3 層の灰色(5Y5/1)粘質土、4 a 層の黄灰色(2.5Y5/1)粘質土、4 b 層の褐灰色(10YR5/1)粘質土、5 層の灰黄褐色(10YR4/2)粘土、6 層の黄灰色(2.5Y4/1)粘土である。II 区の東部から西部にかけて各土層は漸位的に上がっており、両端で約0.3mの比高差がある。近世~近代と推定される水田層は南東部で顕著に遺存していた。全体的に湿地状の地形を呈し、中世以降に水田化されたと推定される。

Ⅲ区の土層堆積状況はⅡ区とほぼ同様であるが、平均するとさらに0.2mほど高まっている。旧水田耕作上と床土は西部ではみられない。Ⅲ区の南西部は微高地で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)弱砂質土の安定した地山となる。

IV区は上部が整地されて削平されている。南西部は島状の微高地であるが、他は湿地状を呈する。

調査区の地形は全般的に湿地帯であり、南西部にあまり広くない島状の微高地が点在している 状況である。南部川の氾濫と堆積作用による微高地の形成は顕著でない。

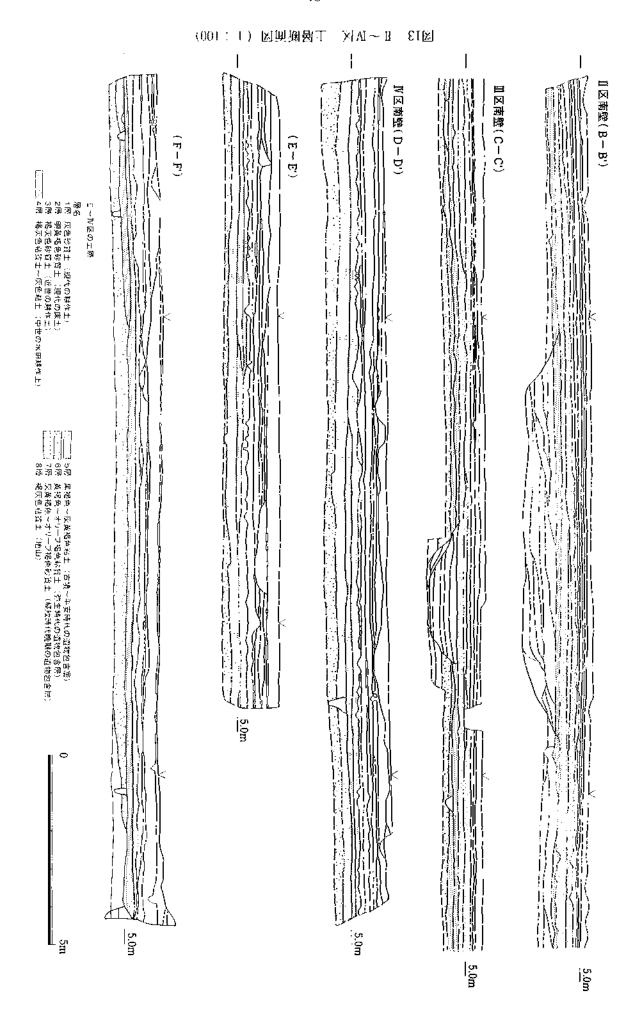
#### (2)遺構(図14~16)

#### 【国区】

Ⅱ区では中世の面で、水田畦畔の痕跡を確認した。輻約50cm前後で、主軸は真北からN-30°-Eで、現状の水田区画とほぼ平行する。水田1筆の面積は不明であるが、南北幅約24mや東西幅約34.5mの区画がみられる。この面では人や牛などの歩行した足跡を検出した。また、北から南へ流れる幅約7~9 m・深さ約1.0~1.2mの自然流路を検出した。突帯紋をもつ深鉢の破片が少量出土した。

#### $[\mathbf{\Pi} \mathbf{X}]$

Ⅲ区では、中世の面で、幅約0.3~0.8m・深さ約0.1mの浅い溝を数条検出した。現状の水田区画とほぼ平行する。その下の面では、不定形な浅い土坑と北西から南東に流れる幅約2.0m・深さ約0.5mの溝と同方向に延びる浅い溝数条を検出した。平安時代の土師器が少量出土した。その下の面では弥生時代から縄紋時代晩期にかけての不定形な浅い土坑とピットを検出した。



## [N区]

Ⅳ区の南西部には西から東に砂礫層の高まりが舌状に延び、その周辺から南部にかけて微高地となっている。その北側から東側にかけては低湿地である。古墳時代から古代の面では、不定形な浅い土坑を検出した。弥生時代の面では西部を中心として、溝・ピット・土坑を検出した。縄紋時代晩期の面では、南部を中心として、ピット・土坑を検出した。

## (3) 遺物(図17)

出土遺物を時代別にまとめると、縄紋時代は晩期の口縁部と肩部に刻み目突帯をもつ深鉢と石器 (スクレイパー)、弥生時代は前期及び後期の甕や高坏、古墳時代は後期の須恵器坏・器台、古代は土師器皿・黒色上器境・平瓦、中世は土師器皿・瓦器皿・山茶境・備前擂鉢・東播系擂鉢・常滑壺・瀬戸美濃青皿・青磁・白磁・土錘、近世は備前擂鉢・伊万里碗などである。

76~78はスクレイパー(削器)である。76はサヌカイト製で、長さ12.0cm・幅5.0cm・厚さ1.4cm の横長剥片の長辺に刃部をもつサイドスクレイパーである。刃部は凸刃状をなし、両面から調整 が施されている。表面は風化が著しく、淡灰白色を呈する。77もサヌカイト製で、長さ6.1cm・幅 2.9cm・厚さ0.6cmの横長剝片の長辺に刃部をもつサイドスクレイパーである。背面には自然面が残 り、刃部は凸刃状をなし、両面から調整が施されている。表面は風化が著しく、淡灰白色を呈す る。78もサヌカイト製で、長さ5.6cm・幅3.6cm・厚さ0.6cmの剥片の長辺に刃部をもつサイドスクレ イパーである。背面には自然面が残り、刃部はやや凸刃状をなし、片面から調整が施されている。 79は縄紋上器の深鉢である。口縁外面端部と肩部に浅いD字状の連続する刻目を施した突帯が巡る。 胎士には 5 mm以下の砂粒を多く含み、焼成堅緻である。80は須恵器坏身である。11径は12.6cmで、 たちあがりはやや長く上方にのび、端部は丸い。受部はやや太く上外方にのびる。陶邑編年のⅡ 形式2段階に相当するものと考えられる。81は山茶碗の底部である。南部系とよばれる荒い胎土 の土器で、退化した低い高台が貼り付けられている。82はL1径8.0cmの瓦器小皿である。83~87は 東播系須恵質の捏鉢である。88・89は備前の擂鉢である。90は中国製の短頸壺で、耳の貼付け痕 がみとめられ四耳壺か三耳壺だと考えられる。体部上部に3条の沈線が巡る。91は瀬戸美濃の灰 釉皿である。外底部には正格子の卸目が施されている。92は中国製白磁皿である。内面には花文 が彫られ、底部は回転糸切で、露胎である。93は中国龍泉窯製の青磁碗である。高く直立する高 台をもち、底部は露胎である。94も中国龍泉窯製青磁碗で、体部は外反し、高台畳付は露胎であ る。95・96は管状の上錘である。

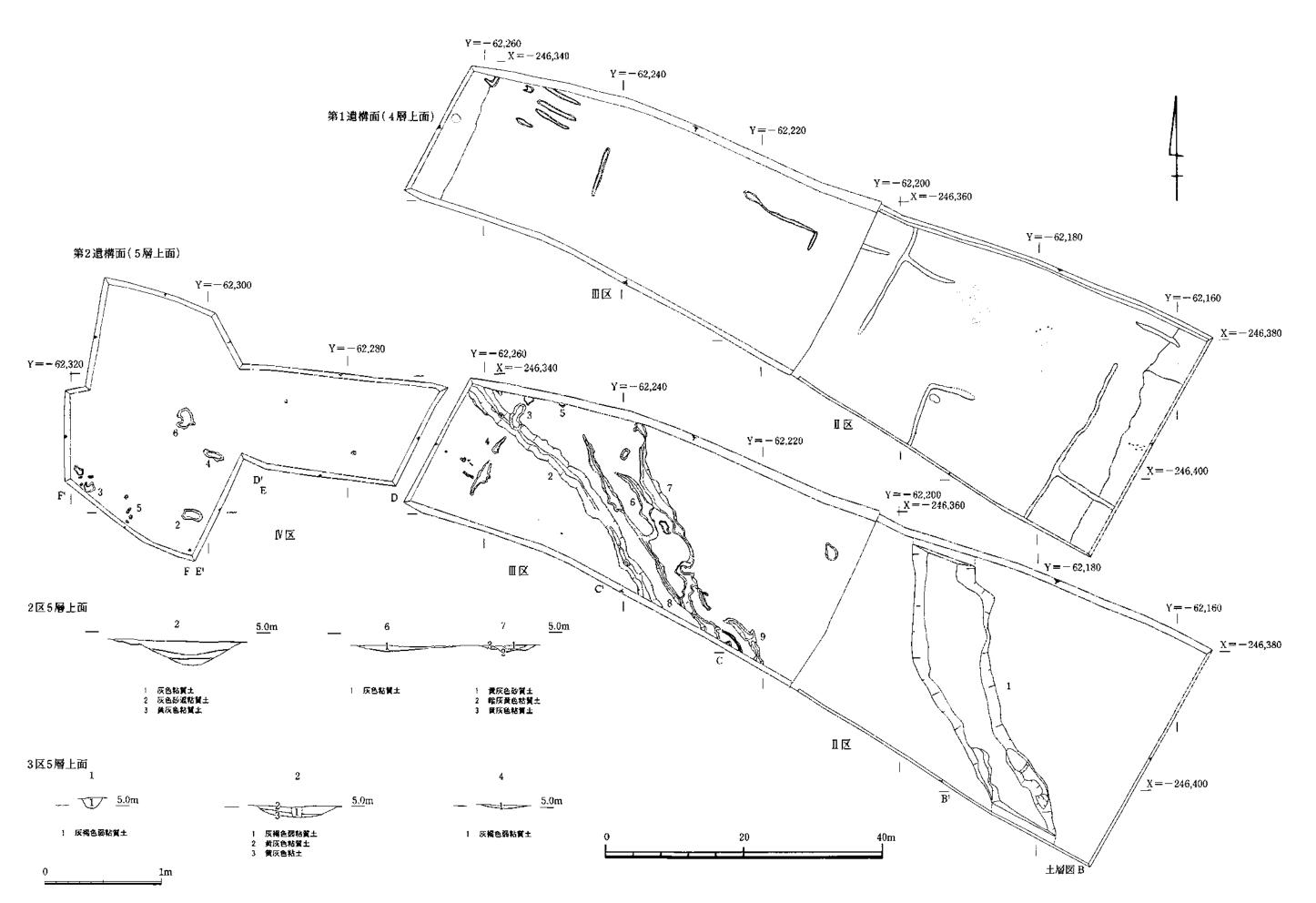


図14 Ⅱ~Ⅳ区 第1・2遺構面(1:500)

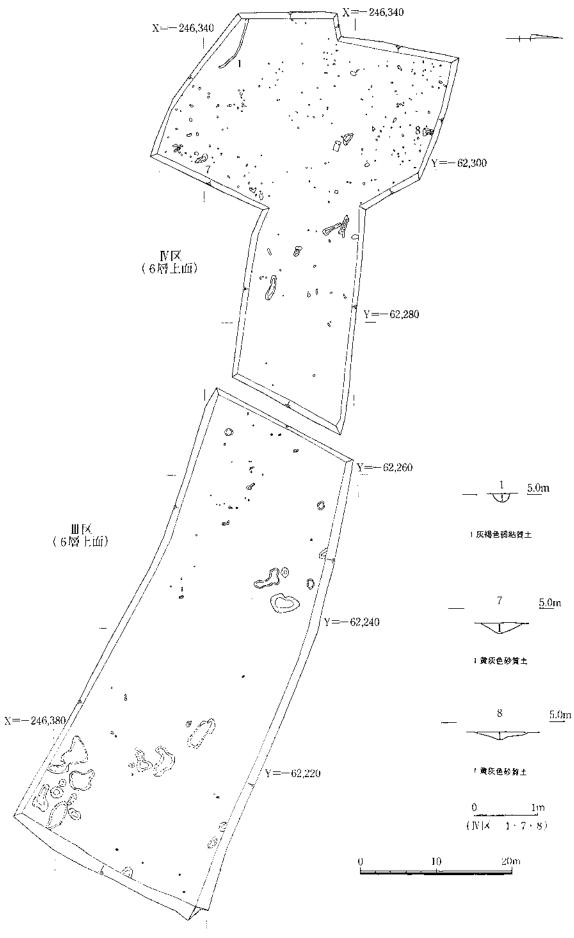


図15 II・IV区 第3遺構面(1:250)

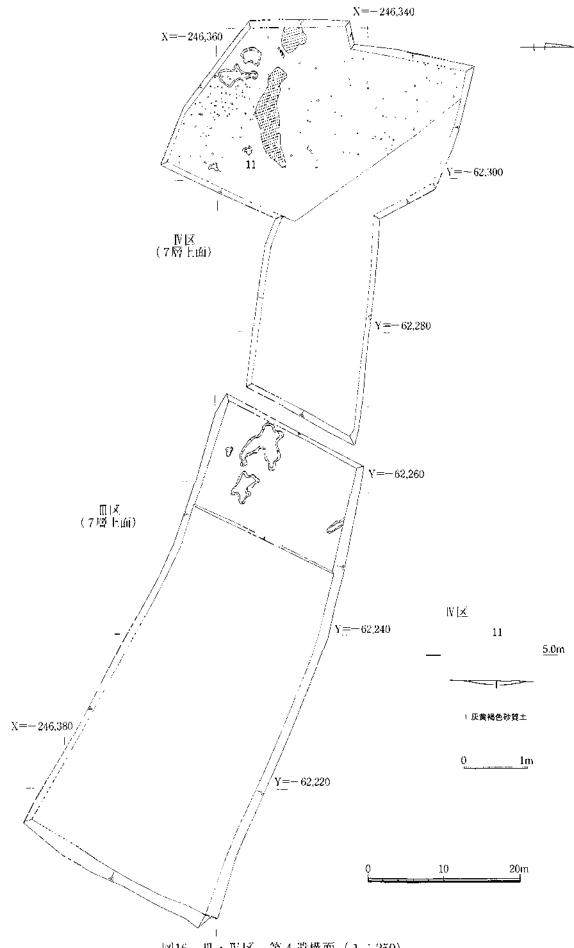


図16 皿・Ⅳ区 第4遺構面(1:250)

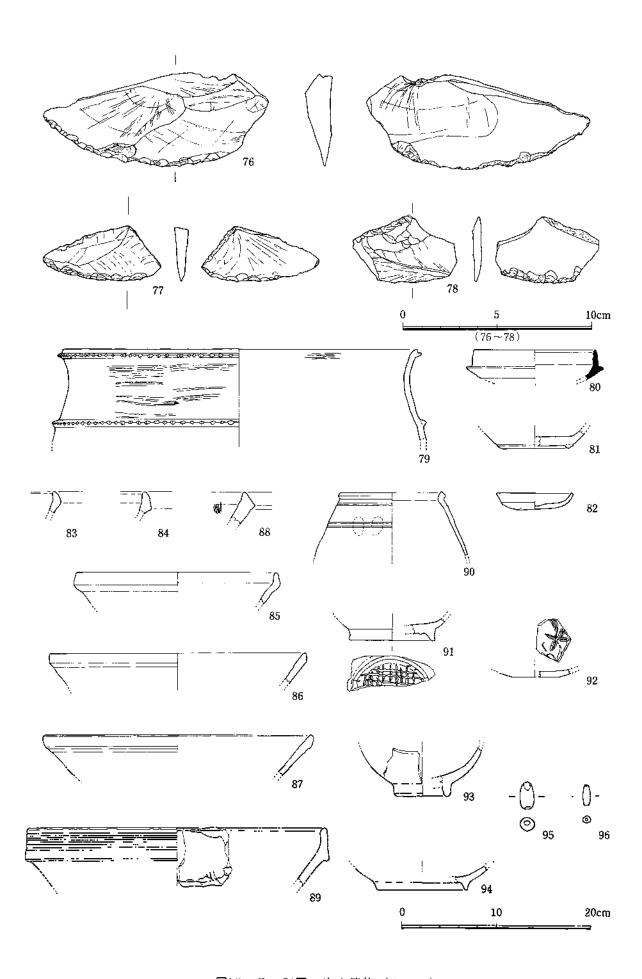


図17 Ⅱ~Ⅳ区 出土遺物(1:4)

# 第3節 平成14年度の調査 (V・VI区)

平成14年度は、V区とM区の二つの調査区について発掘調査を実施した。調査区は南部川村徳 蔵字斎藤に所在し、調査面積は544㎡である。

V区はIV区のすぐ南に設定した調査区で、田中神社から約130m南にあたる。西辺約20m、南辺約11mの台形に近い形状の調査区で、面積は192mである。地形は南西に降る緩傾斜地である。

VI区は V 区の約50m南に設定した調査区である。東西約11m、南北約38mの調査区で、面積は352㎡である。調査区は、用水路により東西に分断されている。

なお、調査時はV区をA区、VI区をB区と呼称しており、当センターの年報等ではこの調査時の地区名で報告しているが、当報告書の調査区名を以って正式な調査区名とする。

#### 概要

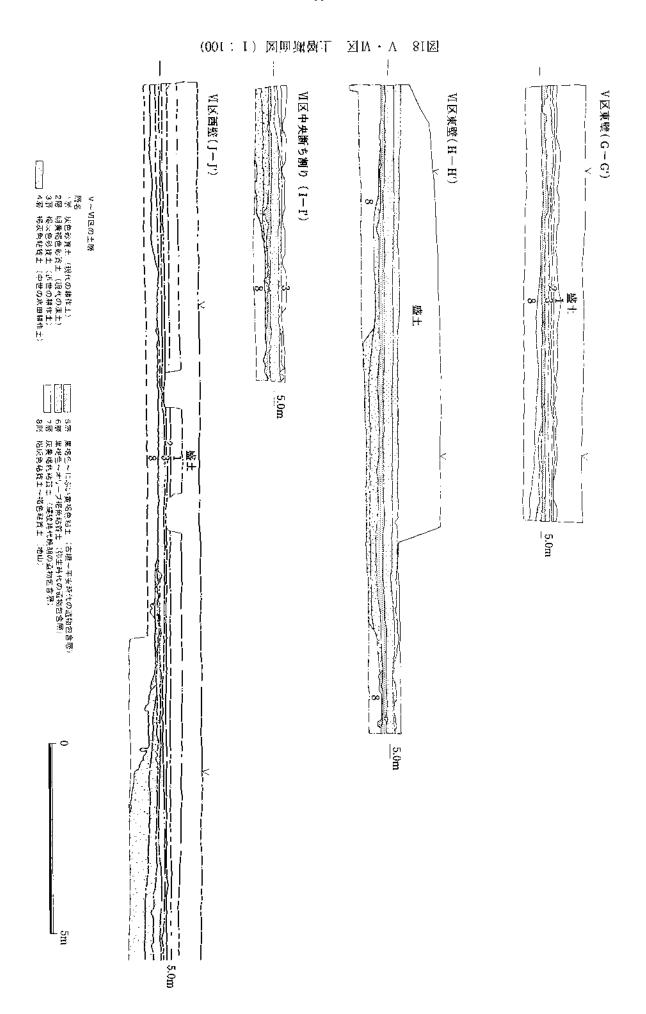
V区・IV区で確認された最も古い遺構は縄紋時代晩期のものである。V区ではそれ以降の各時代の遺物包含層が堆積しているが、各層の上面に良好な遺構面は残存していない。一方、VI区では南側に安定した微高地があり、古墳時代後期の良好な遺構面が検出された。その後は、古代には湿地、中世には水田、近世には水田及び畑となっており、出土遺物は微量である。

周辺の試掘・確認・立会調査から本発掘調査までの一連の調査により、V・VI区周辺には縄紋時代晩期の微高地が存在したが、弥生時代中期頃の流路の移動により少なくとも3つの島状微高地に分断されたことを確認した。

# (1) 層序(図18)

基本的には I ~ IV区と同様の堆積傾向を示すが、比較的安定した微高地に立地する。土色と土質は図18のとおり、各層の内容は下記のとおりである。

- 1 層は現代の耕作土、2 層は床土。 W区では畑作(あるいは水田の裏作)用の畝跡群が検出された。
- 3 層は近世の耕作上。鉄・マンガン粒を含む砂質土である。1 層との比較から、水田ではなく、 畑作を行っていたものと推定される。陶磁器が出土した。
- 4層は中世の水田耕作上。鉄・マンガンの粒を多く含み、砂の比率の低い粘質土である。上師器・瓦器の破片が出土した。
- 5層は古墳時代から平安時代までの堆積土。均質な灰色の粘質土であり、湿地状を呈していた ものと推定される。須恵器が出土した。
  - 6層は弥生時代~古墳時代までの堆積上。弥生上器・上師器と見られる破片が出土した。
  - 7層は縄紋時代晩期の堆積土。突帯紋上器の破片のみが一定量出土した。
- 8 層は縄紋時代晩期以前の堆積土。 V区では遺物は出土しなかったが、 Ⅵ区では側溝にて、 8 層上面に近い位置から、土器片が 1 点出土している。



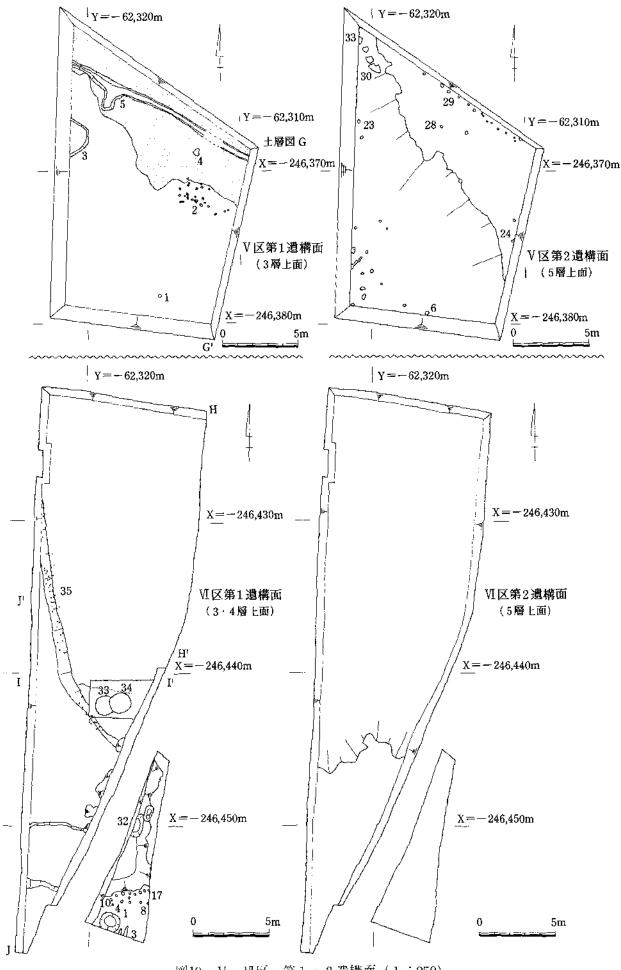


図19 V·VI区 第1·2遺構面(1:250)

# (2) 遺構

遺構名は調査区ごとに設定した。V区では遺構  $1 \sim 85$ 、V区では遺構  $1 \sim 146$ を検出した。このうち、遺構の性格の判断がつくものについては、遺構  $1 \rightarrow$  土坑 1 のように表記し直した。

<第1遺構面(4層上面)─中世・近世- >(図19左)

## [VX]

4層(中世水田耕作土)をベースとしているので平坦な遺構面であるが、地盤の土色が南北で異なっている。調査区南半は鉄・マンガンの粒が酸化しており土色が全体的に褐色がかっているが、北半(図19のスクリーントーン部分)は鉄・マンガンの粒があるものの酸化しておらず、土色は灰色を呈する。これらの状況から、湿地状の堆積は残存しないが、中世以降に調査区北半は湿地となっていたものと推定される。

足跡1 牛の足跡である。湿地との位置関係から、水を飲みに来たものと考えられる。

溝 5 湿地の形成原因とも考えられる溝である。東→南約28度の方位へ、約1度の角度で流れている。途中に水溜め状の窪みがあり、周囲を板で上留めしている。

# 【VIX】

4層上面と3層(近世堆積上)上面に形成された遺構面であるが、図では第1遺構面としてま とめた。中世の水田面に対して、南西方向に3段階の近世の落ち込みがある。

土坑1 近世の土坑である。4段階の水性堆積で埋まっている。

ピット4~17 2列に並んだピット列である。ピットは浅く、底は平坦である。

土坑33 土坑34と同規模・同形状の土坑である。土坑34の1段階古い据付痕と考えられる。

土坑34 径約1.4mの土坑の周囲を漆喰で固めている。漆喰に類するものと砂利を混ぜて固めたものと推定され、凝灰岩に近い風合いを呈する。磁器片と木製の棒が出土した。土坑33・34の周囲には小さな穴が確認されている。遺構の性格は判然としないが、M区付近は近世に鋳物師が住んでいたと推定される場所であり、鋳造関連の遺構である可能性が考えられる。

杭列35 4層上面及び4層掘削中に検出した乱杭列である。

<第2遺構面(5層上面)—中世水田開発以前—>(図19右)

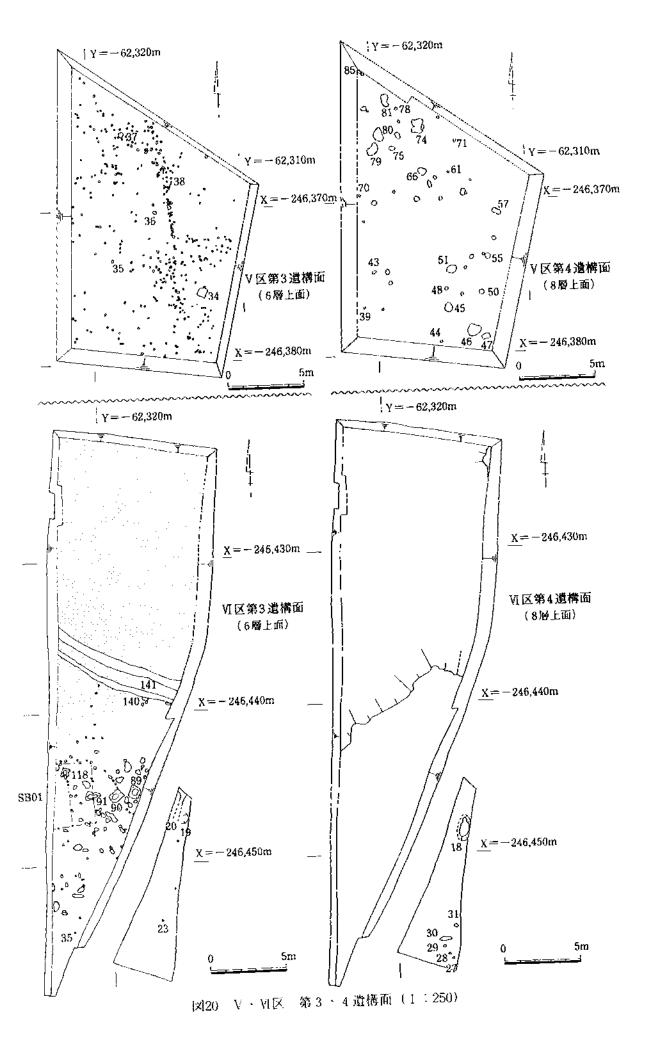
### 【V区】

5層(古墳時代〜平安時代の湿地堆積土)上面の遺構面で、南西へ降る傾斜地である。

杭列29 4層掘削中に検出した杭列であり、中世の水田畦畔に伴うものと考えられる。東→南約35度の方位に並んでおり、区画の方位は第1遺構面の溝5を経て、ほぼ現在まで踏襲されている。 杭(107)は57cm残存しており、釘が3本(104~107)打ち込まれた杭も出土した。

## 【VI区】

調査区北側から中央まで、湿地化している状況を確認した。



<第3遺構面(6層上面)—弥生時代~古墳時代後期>(図20左)

### [VX]

南西へ緩やかに降る傾斜地で、4基の土坑・ピットのほか、約360基の小型ピット状遺構(ピット群38として一括して扱う)を検出した。

ピット群38 径4cmのピット群。断面は深さ20cm以下の円筒形、埋土に第4層と第5層に類似する土が入る。

### [VIX]

調査区南側が微高地上を呈しており、掘立柱建物跡等がつくられている。調査区北側の自然流路跡は埋まっているが、水はけが悪かったものと思われ、溝140・141より北側には遺構がみられない。

上坑89・90 土坑89は上面で一辺約90cm、中段で一辺約50cmの隅丸方形の土坑で、深さは55cm。 上坑内は2層に分かれ、下層には径約8mmの植物を燃やした炭が残り、上層には底部を抜いた土 師器甕を据えている。上坑90も同様の土坑であり、土器片が出土している。

溝140・141 島状微高地の縁辺にある直線的な溝である。この溝を挟んで遺構の有無が分かれることから、排水を兼ねた区画溝の性格をもつものと判断される。

掘立柱建物跡 S B 01 4 間×3 間以上の掘立柱建物跡である。柱穴は径約15cmで、掘方はない。 南北1 間は約100cm、東西1 間は変則的で約70~90cm。方位は座標北から3.5度酉に振れる。土坑89 と同様の埋土で埋まるので、古墳時代後期頃の建物と考えている。

<第4遺構面(9層上面)—縄紋時代晩期—>(図20右)

### 【V区】

南西へ緩やかに降る傾斜地で、40基の土坑・ピットを検出した。

上坑46 径75cm、深さ13cm、灰黄褐色粘質土で埋まる。

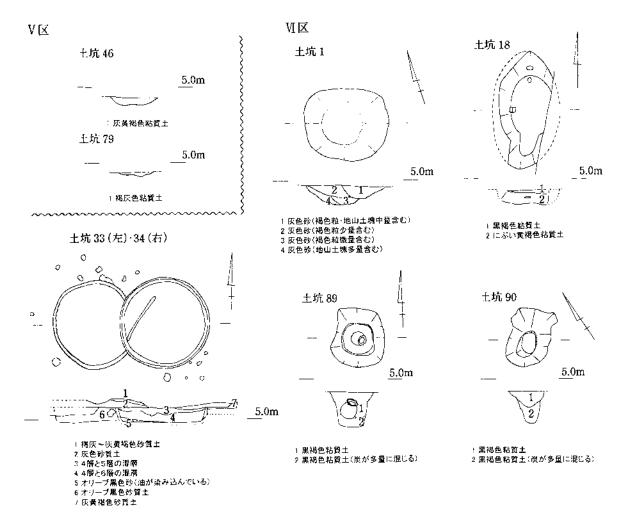
土坑79 径60cm、深さ8cm、褐灰色粘質土で埋まる。土坑46~55、土坑79~81は径5~6mの弧状を描いて分布しており、埋土に炭化物が混入していることから、竪穴住居跡の下端部である可能性を考えたが、竪穴住居とする積極的な状況証拠は得られなかった。

#### [VIX]

調査区南側には微高地状の地形が残存している。また、調査区北東端では別の微高地の縁辺部を確認した。この2つの島状微高地は従来一つの微高地であった可能性があるが、調査区の中央から北側に弥生時代のものとみられる自然流路があり分断されている。

土坑18 長さ180cm、幅推定100~120cm、残存する深さ25cmの土坑である。

ピット31 7層と類似する上で埋まるピットであり、突帯紋上器片が出土した。V区の土坑79等 同様、弧状を描くピット列となっている。



## 掘立柱建物跡 SB01

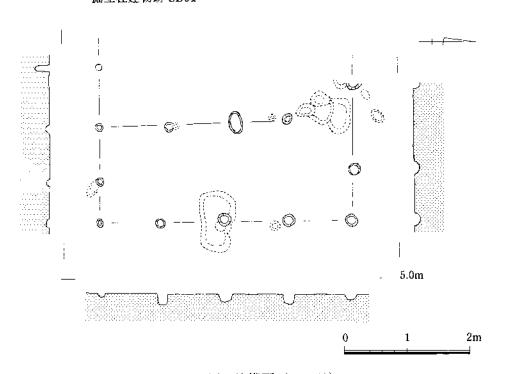


図21 V · VI区 遺構面(1:60)

### (3)遺物(図22)

V区・VI区ともにコンテナ 2 箱分ずつの遺物が出土した。出土遺物の内訳は V区が縄紋土器 213 点、土師器 12点、サヌカイト片 1 点、鉄釘 3 点であり、VI区が縄紋土器 19点、土師器 60点、須恵器 9 点、陶器 13点、磁器 7 点、土錘 3 点である。なお、微細な土師質の破片は土師器とし、一括の遺物は 1 つとして数えている。中世水田畦畔に伴う杭を計 3 本、サンプルとして採取した。

97・98は土器底部。伴出する土器片から、縄紋時代晩期の突帯紋土器深鉢の底部と考えている。 底径は97が8.1cm、98が5.5cm。それぞれVI区上坑91と、V区土坑61から出土した。

99は須恵器坏身。11径9.9cm、残存高3.6cmで、立ち上がりは短く、内傾する。 VI区 5 層から出土した。

100は上師器甕。口径14.9cmで、胴が長く、外面は桐毛日調整を施す。上部は完全に残っているが、底部は欠失しており、破片も伴出していない。M区土坑89から出土した。

101~103は管状上錘。長さ3.3~4.4cm、最大径0.9~1.3cm。 VI区の3・4層から出土した。

104~106は鉄釘。断面は四角形で、頭部を折り曲げる。V区杭列29の杭に打ち込まれた状態で出土した。

107は杭。V区杭列29(中世水田畦畔に伴う杭列)の杭のうち残存状態の良いサンプルを実測した。下端を尖らせ、上端付近には一方から鉈のようなもので叩いた傷が5・6箇所みられる。

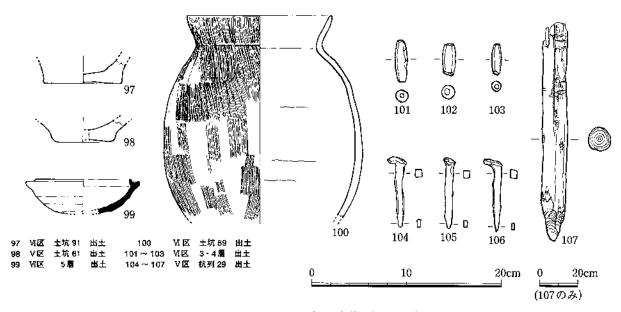


図22 V · VI区 出土遺物(1:4)

# 第3章 まとめ

南部平野では、ここ数年来、近畿自動車道南部インターチェンジ建設工事及び、国道424号改築工事、県道上富田南部線道路改良工事、古川高速関連改修工事、大規模圃場整備などの事業が集中して実施され、それに伴う発掘調査面積は延べ72,000㎡を超え、本県ではかつて例の無い大規模な調査が行われてきた。縄紋時代から古墳時代に至る集落跡や弥生時代初頭の堰、室町時代後期の高田上居城跡など新たな考古学的な発見が相次ぎ、南部平野の歴史の解明が進みつつある。

今回の発掘調査地点は徳蔵地区遺跡の北西部で、遺跡の中心からややはずれた縁辺部である。 大部分が湿地状の地形を呈し、自然流路や溝が北西部から南東方向に流れ、中世以降は水田化されている。湿地の中に部分的に狭小な島状の微高地があり、比較的安定した褐色土が堆積している。縄紋時代晩期から古墳時代にかけての遺構が営まれている。

平成10年度に調査した大溝の庄内式土器併行期の堆積土から多数の建築部材と有頭棒および、県内で初めて鳥形木製品が出土した。鳥形木製品は弥生時代の初めに稲作技術とともに日本に伝来し、穀霊を運ぶシンボル、或いは害虫を駆除する益鳥として考えられ、農耕儀礼に使われたものだと推定されている。南部平野周辺の晩稲や西本庄の丘陵地帯では、新しい埋式の突線紐式の大型銅鐸などが6例みつかっている。今回発見された鳥形木製品は底部に2ケ所穿孔が見られるため、棒の先にくくりつけて鳥竿として、集落からやや離れた水田部の水辺で、有頭棒や銅鐸などと供に農耕儀礼に使用された可能性がある。県内から出土した弥生時代から古墳時代前期にかけての鳥形上製品は5遺跡8例有り、海南市の亀川水系に位置する弥生時代の大規模集落である岡村遺跡では銅鐸形土製品と鳥形土製品が弥生時代中期後半の溝から出土している。時期的には異なるが、今回の検出例は県内の弥生時代の農耕儀礼を考える上で、貴重な一例だと言えよう。

άĚ

- 1 用騎雅史『大塚遺跡―マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』御坊市文化財調査会2002
- 2 I区は渋谷高秀「徳蔵地区遺跡」子(財) 和歌山県文化財センター年報1998』和歌山県文化財センター1999、II・III・IV区は黒石哲夫「国道424号道路改築工事に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査」『同2001』、V・VI区は丹野拓「国道424号道路改良工事に伴う徳蔵地区遺跡の平成14年度調査」「同2002」に概要を報告した。
- 3 川崎雅史『大塚遺跡―町道芝東吉田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』御坊市文化財調査会編、南部町教育委員 会発行2002
- 4 永光寛 『片山遺跡A地点発掘調査概報』南部町教育委員会・片山遺跡調査委員会1978等で確認している。片山遺跡では、このほかに和歌山県教育委員会によりB・C・D・G地点の調査概報が刊行されている。
- 5 村田弘「大塚遺跡現地説明会資料」和歌山県文化財センター2002
- 6 月野拓「南部荘園関連遺跡の第2次発掘調査上子(財)和歌山県文化財センター年報2002]和歌山県文化財センター2002 で概要が報告されており、本年度報告書が刊行される見込である。

- 7 異三郎・山本賢・小賀直樹、益田雅司 [大日津泊り遺跡発掘調査機報] 南部町教育委員会2003
- 8 海津一朗ほか『中世再現1240年の荘園景観―南部荘に生きた人々 』 和歌山県中世荘園調査会2002
- 9 用輪雅史「平須賀城跡発掘調査報告書」南部川村教育委員会1996、佐伯和也「高田上居城跡発掘調査」2003、高田上居城 跡中心部については、和歌山県文化財センター年報で概要が報告されており、近年報告書が刊行される見込である。
- 10 和歌山県文化財センターの調査により、県道上富田南部線に沿って旧大年・梅田・大塚遺跡の範囲で鋳造関連の遺構を確認している。
- 12 中村浩丁陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会1977
- 13 主な調査成果は次のとおり。 V区と Y区の間の試掘坑は流路の中にあたり、弥生時代中期の上器片が検出されている(武内雅人!32.徳蔵地区遺跡・高田土居城跡③00-101」 「和歌山県埋蔵文化財調査年報―平成13年度…」 和歌山県教育委員会2003)。 V区北東部に僅かに確認された微高地の約30m北に、村道新設に伴う試掘坑をあけている。安定した微高地が確認され、縄紋土器片とサスカイト片が出上している(丹野拓 「32.徳蔵地区遺跡・高田土居城跡①01-173」 「和歌山県埋蔵文化財調査年報―平成13年度―」 和歌山県教育委員会2003)。 VI区と現在の国道424号線を挟んで西側にあたる位置における立会調査では、微高地は検出されず、流路の中であった(532.徳蔵地区遺跡・高田土居城跡延97-327」 「和歌山県埋蔵文化財調査年報―平成13年度―」和歌山県教育委員会2003の地点。立会調査の担当・富加見泰彦氏の教示による。)
- 14 河内一浩「埴輪祭祀の前夜 紀伊における鳥形土製品の系譜と位置付けー。『紀伊考古学研究第5号』 2002



遺跡遠景①(東から)



遺跡遠景② (西から)







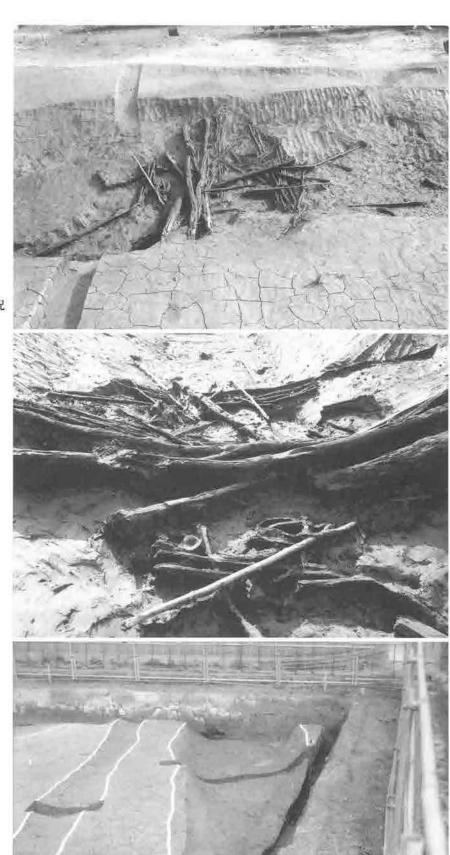
I区 溝1 全景 (東から)



I区 溝1 (南西から)



I区 溝1 土層断面 (北から)



I区 溝1 木製品出土状況 (東から)

I区 溝1 同近景 (西から)

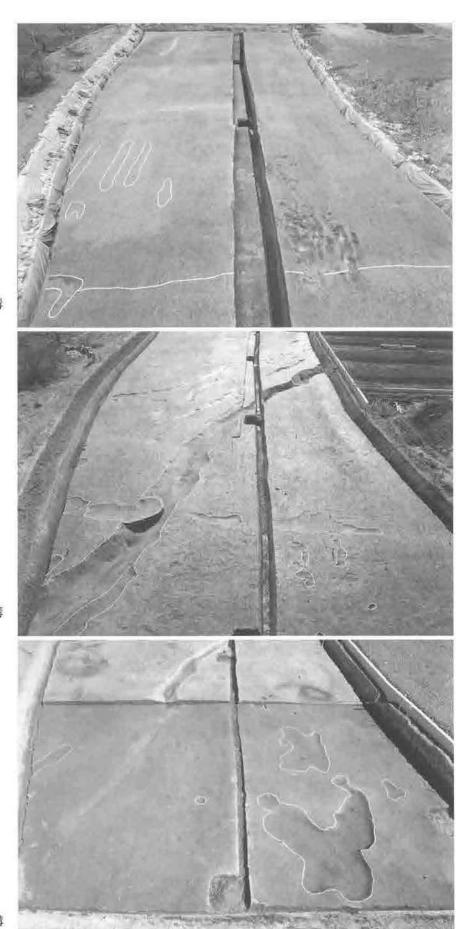




Ⅱ区 4層上面 検出遺構 (北西から)

Ⅱ区 5層上面 検出遺構 (南から)

Ⅱ区 4層上面 人の歩行跡



Ⅲ区 4層上面 検出遺構 (西北西から)

Ⅲ区 5層上面 検出遺構 (西北西から)

Ⅲ区北西部 7層上面 検出遺構 (西北西から)



Ⅲ区 南壁中央部 土層堆積状況

IV区 6 層上面 検出遺構 (北から)

N区 6層上面 土坑・ピット (南から)



V区 第1遺構面 (東から)

V区 第3遺構面 (東から)

V区 第4遺構面 (東から)



VI区 全景 (北から)



VI区 微高地上の遺構状況 (北東から)



VI区 南西部近景 (北から)

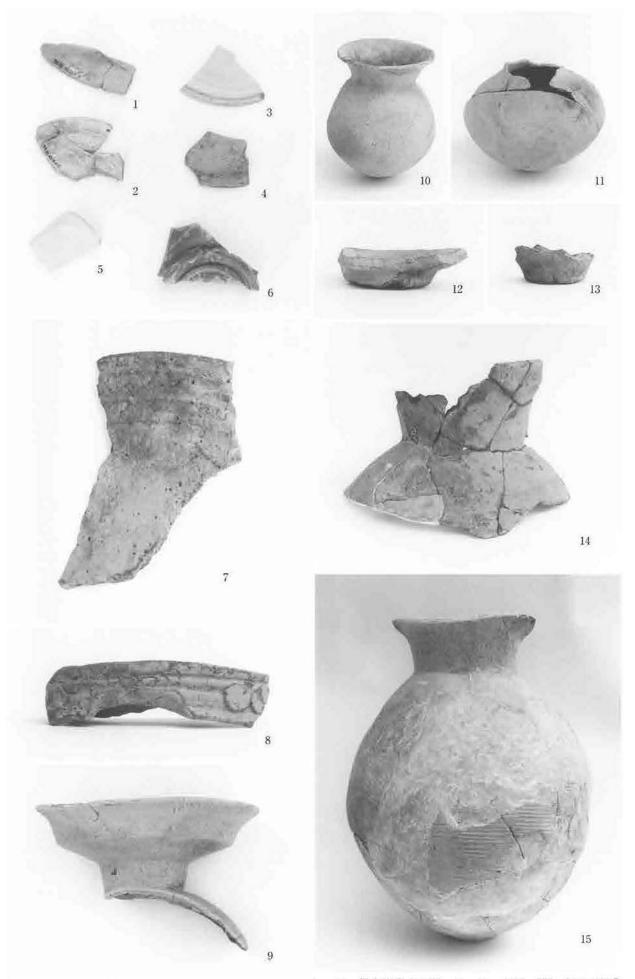


VI区 土坑 S X34 (南から)

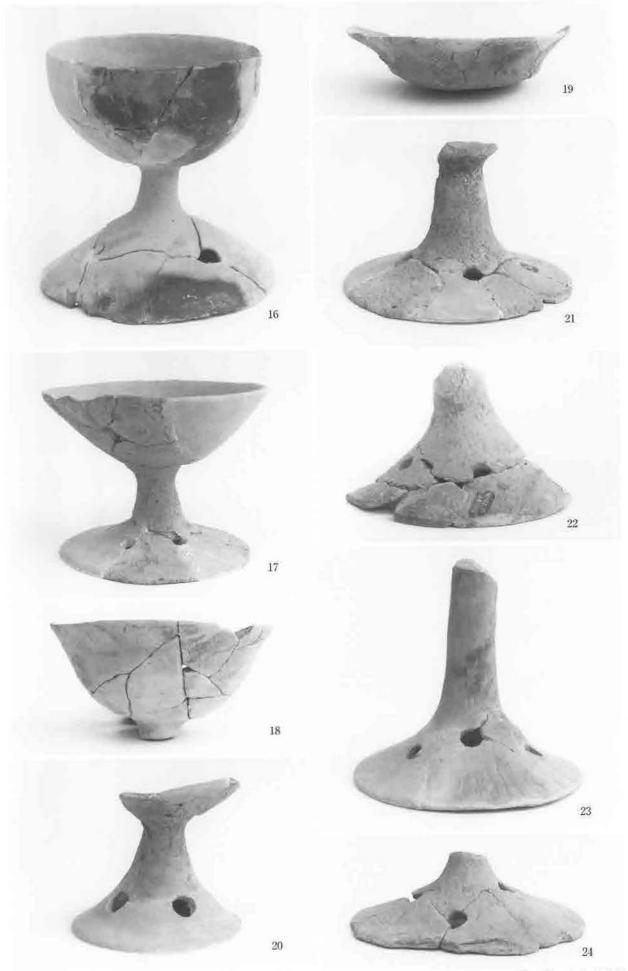
土坑 S K 89 (南から)

NIX

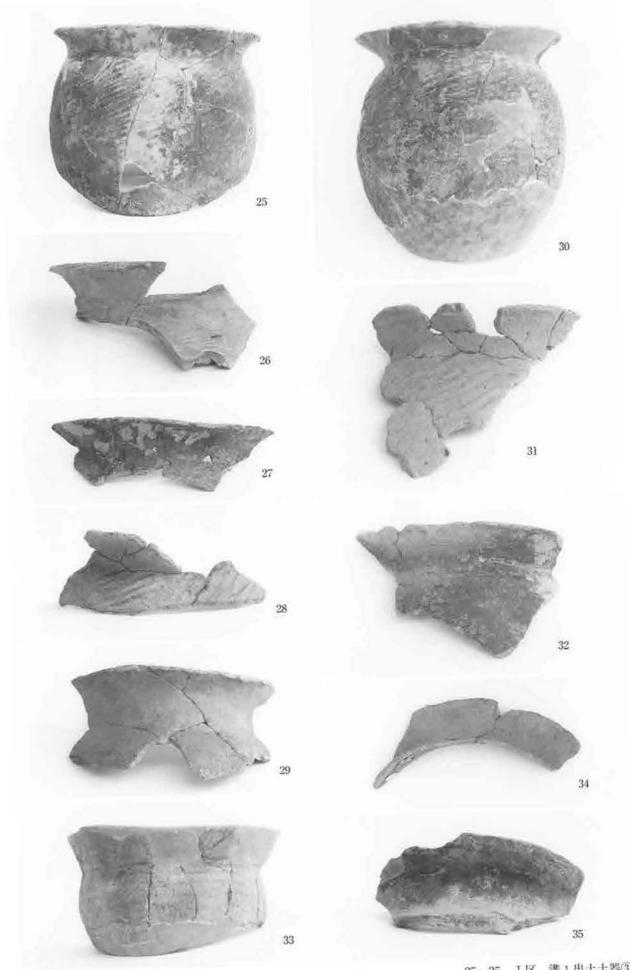
VI区 掘立柱建物跡 S B01 (東から)



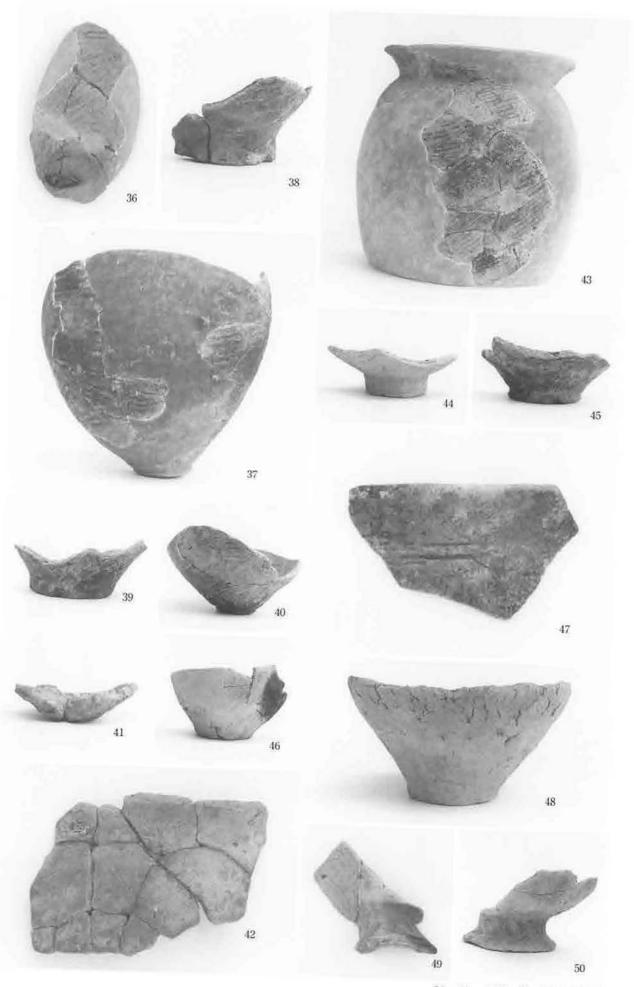
1~6 包含層出土土器、7~15 I区 溝1出土土器①



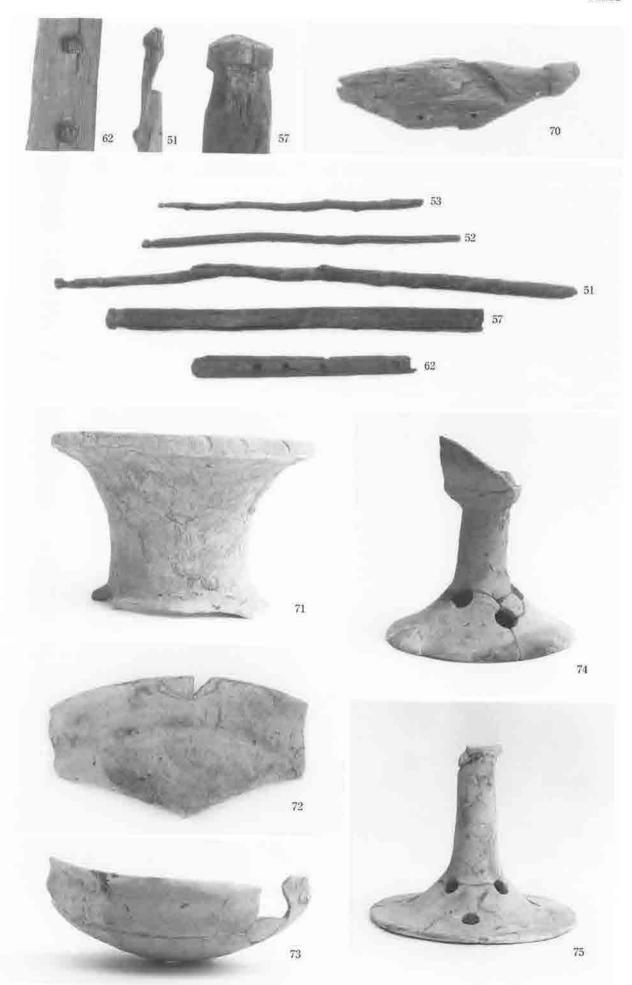
16~24 I区 溝1出土土器②



25~35 I区 溝1出土土器③



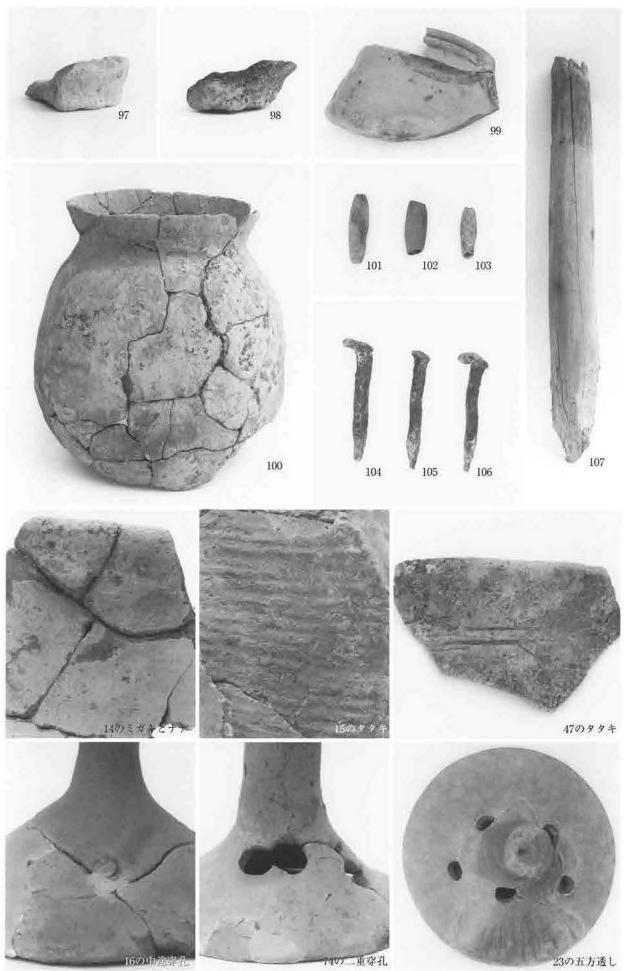
36~50 I区 溝1出土土器①



51~70 I区 溝1出土木製品、71~75 I区 溝5出土土器



76~96 II~N区 出土遺物



97~107 V・VI区 出土遺物、下段・特徴的な成形・調整痕

# 報告書抄録

ふりがな	とくぞうちくいせき						
書 名	德威地区遺跡						
副書名	国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査報告書						
編著者名	丹野拓・黒石哲夫・渋谷高秀						
編 集 機 関	財団法人 和歌山県文化財センター						
所 在 地	〒640-8268 和歌山県和歌山市湊571-1 TEL 073-433-3843						
<b>発行年月日</b>	西暦 2003年8月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	하다 · A · 타디 타디	調查面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村 遺跡番号	о,		調查期間	mi	
	がかまませんかなかながなる 和歌山県日高郡 ************************************	30389 54	33度 46分 30秒	19分	第1次調查 19981026~ 19990107 第2次調查 20011119~ 20020607 第3次調查 20021119~ 20021206	1.612 4.341	国道424号線道路改築
所収遺跡名	種別 上な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
徳蔵地区遺跡	散布地 縄紋 助畑 弥生	土坑・ピット 溝・ピット・土-	<u>-</u>	縄紋土器・スクレイパー   弥生土器		突带紋土器	
(AE 16/1)	古墳	掘立柱建物跡	/ Li	//		  庄内併行期の土器群	
		土坑・ピット・	本	須恵器		鳥形木製品	
	平安	溝		黑色上器			
	中世	水田畦畔・足跡		瓦器·山茶碗·土師器			
	近世	満・ピット・足 鋳造関連遺構	跡	陶磁器·土錘·鉄釘·杭			

# 徳 蔵 地 区 遺 跡

一国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査報告書一

2003年8月

編 集 発 行 財団法人和歌山県文化財センター 印刷・製本 西岡総合印刷株式会社